
道標のあずさ

antipas group

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道標のあずさ

【Nコード】

N3430Z

【作者名】

antipass group

【あらすじ】

人なら誰しもが考える、心の深いところにある哲学的なこと。心理的なこと。ヘンな女の子・あずさ・に巻き込まれていく男女の数奇なストーリーここに開幕！

夢遊病少女に、植物状態の少女、重病棟勤務の看護師など…、おのおのの立場で、それぞれが悩んでいる人生の不思議。

彼女たちは奇妙な縁から倉下梓という女の子を捜すことになって…、彼女たちは無事、思いの果てにある答えに辿りつくことができるの

だろうか…

毎週 月・木更新！

この小説はArcadiaにも投稿されています。

前作「あずさが通る！」 <http://ncode.syosetu.com/n0971w/>

人で在って、人で無いもの（前書き）

ご無沙汰しています。今作「道標のあずさ」は前作「あずさが通る！」よりも格段スケールアップしております！あずさ以外にもたくさんのキャラが再登場しています。場所も熊本だけでなく、某古都を出したり、実在する宗教の解釈も絡めたりと前作よりも複雑で凝った構成になってます。前作同様、ぜひ楽しんでください！

人で在って、人で無いもの

序章 人で在って、人で無いもの

「まあとにかくおめでたいこった。あの小さかった子供が、今やこんなボインちゃんだからな。立派に育ちよって…わしも年を取るわけじゃの…」

彼はそう言って、大ジョッキを煽った。

「お前って、いま新聞記者だったっけか？…仕事は順調か？」

「ああ、順調だ。今は編集部班長だよ。部下だっているぞ」

「フン…ガキがいつちよ前に班長と来たか」

彼はそう言って、浅くため息をついた。

「……酔っ払う前にやっちまうか。ホレ…、メガネ取って、顔を近くに寄せなさい」

店を退いたと言っても、アレはまだまだ現役のようで…。私は素直にメガネを取って、彼に顔を寄せる。

「最近すっかり乱視が進みよってな…ホレ、もっと近くに寄らんかい」

「あんたの場合もう老眼だろ。あまり寄らせるな。気色悪い……」

「引退前も爺婆ばかりでな。若い娘は久しぶりで興奮するのう…」

「もう若くは……ええい！触るな！…この距離で…さっさと観ろっ」

「若いのにケチじゃのう…もっと年寄りを大切に扱わんか…、まっ

たく…」

彼は水晶玉も虫眼鏡も使わない。ただ…顔を見るだけだ。ウチの社の近くを通ったというだけの理由で、私は酒の席を都合させられた。

「渋い顔しおって！…大スクープの一つや二つは都合してやるわい。酒の一席や二席、安いもんだろぅが」

「…いくらあんたの占いが当たるからといって、起こっても無いことを記事に出来るか！」

「なんじやい…固いのう。あんたんとこは」

「…ウチ以外の社だつてみんなそうさ」

彼は焼き鳥の串を豪快に口先から引いて、肉とネギを頬張った。人の金だと思つて遠慮が無い。

「で、…どうだった？…私は？」

肝心の事を彼に尋ねる。彼の…コレばかりは、ドキドキせずには聞かれない。

「あ、お姉さん！大ジョッキおかわりええかいの？串も全種類三本ずつ追加じゃ。ジャンジャン持つて来なさい！」

言つて、今持っているジョッキを飲み干し、ガツンとテーブルに置いた。

「なんじゃい。結果、聞きたいのか？」

聞きたいに決まってる。それなしにこれだけ飲み食いする気なんだろうか。この爺は…。あまり調子に乗ると、それはそれで厄介なことになる…。私の表情からそれを察したかのように、彼は喋りだした。

「洋香：お前、迷つとるのう。結婚：いや、違うな…。仕事のことか、男は相変わらずいないようだのう？部下にも、以前より恵まれておるな……」

言って、おしぼりで顔を拭きながら、目線だけをこっちに向けて、

「：フン、脱サラでも考えとるのか？お又シ??」

そう言う。

相変わらずよく当てやがる…。占いは、知識と経験は一割ほど、推理が五割、感が五割…。と昔から言い張っていた爺…。計算が合わないのが爺らしく、言い回しに爺さんの天邪鬼な感じがよく出ていた。

「：おぬしは未だ帝王の相を持つてる。ほんの少しじゃがの…。何をやってもしそれなりの成功はするじやろうよ。まだまだ若いのに…そのツラ持って迷うかねえ…。好きにやればいいさ」

彼は、優しい目で静かに私にそう言って、品書きを手を取った。

「あんた…まだ食べるのか？」

「なんじゃい?…経費で落ちるじやろ??」

「…今は経費もロクに落ちんよ。時代性は読めんのかあんたは…」
「なんじゃ…お前のところも厳しいのか？」

彼は名を藍老伊三郎と言い、この熊本県熊本市に占いの店を持つ、名うての占い師だった。若い頃は日本各地を放浪し、あらゆる人相を観てまわり、自分の見識を高めた。道中のどこかで占い…というか、人相見の極意のきっかけを掴み、真理を開眼したとすることで…それ以後、彼の占いは、酔っ払い相手だったチンケな商売から、実業家や政治家相手の…会社や国の未来をも左右するものにまで成長した。そして、その名が天下裏で轟くほどとなり、社会的成功と金名譽、人脈を手に入れた。

ここまでは良かった。しかし、ある日…ふと鏡を見た際、自分の人相の難を見抜いてしまった彼は、破滅の道を辿る前に、家土地と財産をすべて処分し、熊本市という自分の生まれ故郷に、四畳半のアパートを借り…、店となる小規模な商業スペースを間借りし、占い屋を開いて…細々と生きることにした。本人曰く…それで自身の死を免れたそうだ。

私は小学生だか中学生だかの時、ホームレス同然だった彼と、ふとしたことから知り合い、学校のつまらないことから、人生のあり方、オカルティックなことまで…彼に喋った。

彼とはそれ以来…十数年の付き合いになる。生まれつき、オカルトなこと…霊だとか、UFOだとか、未確認生物だとか、X-FILESだとか…そういうモノが好きだった私は、当時お化けみたいな格好をして…河原にいた彼に、好奇心いっぱい話しかけたことを今でも覚えている。

会った時から彼には口癖があった。

「ガキにわかるかねえ？ 要は…見てみたいだけなのよ」

「…何を？」

「神か悪魔か…そういうもんじゃな…」

子供だったこともあり、最初こそ小馬鹿にしたものだが、事あるごとに言っわ、目は真剣だわ、そして…どこか寂しそうに言っもんだから…いつからか、私にとってもすごく気になることとなった。そして、私は聞き逃さなかった。彼は何度か、

「…もう一度見てみたい」

と、そう付け足すこともあった。もう一度ということは、今までにも見たことがあるということだ…神だか悪魔だか…そういう人外のモノを…。

しかし、彼はその存在をこう説明していた。

「まーたお前は…話をそういうオカルティックな方へ持って行きたがる…。人外のもんなんてこの世におけるわけないじやろ。…わしが言っとするのは、あくまでも人間のこっちゃ」

藍老の爺さんは、占い師なんぞやってるくせに、私と違って…オカルトなものは頭から否定する傾向にあった。そういう面では実につまらない。

「お前らよく芸能人オーラとか、雰囲気がある人とか言っておるじやろが。世の中にやな、あのオーラかなんだかよくわからんもんを、滅茶苦茶なレベルで醸し出すやつがおるんじやな。…そういうモンをだな、わしや神だの悪魔だのと呼んでおるんだ」

彼はよくそう言っていた。そして、神だか悪魔だかをもう一度目にする事ができたなら、わしや引退する…とも。

幾度と鳴っていた、公衆電話からの着信。公衆電話からかけてくるのは彼しかない。掛け直しが利かないため、連絡はいつも一方的だった。その彼からの連絡は、十日ほど前…年の暮れの忙しい時期に来た。

「お、やっと電話に出よったのう。…いやなに、今？…待ち時間をヒマしてるとこじやい。実はの、先日わしや店を畳んでの。今度近くに行ったときに酒でも一杯、と思っとつてね。もしもし？…まだまだ腕は確かじゃぞ。酌に付き合ってくれるなら、特別におぬしをまた見てあげてもよいぞ」

店を畳んだ？…爺、ついに見たのか？神だか悪魔だかの存在をついに見たのか…。ついこないだまで、

「わしや、一生こうして…せこい店を構えておかねばいかんのかもしれんなあ…」

などと、弱気に言っていたことが思い出される。良かったのか悪かったのか…。

藍老爺に関しては、もうひとつ気になることがあった。それは彼の占いの腕のこと。旅路の最中に開眼したとの話は、すでに触れた通りだ。酒に飲まれた彼が、一度だけ口からこぼしたその言葉を、私は鮮明に覚えている。

「いや、それがの…開眼したと言っても、そんな大仰なもんじゃない。ちよつとしたコツを教わった…というか気づいただけでの。それを必死で真似…というか、実践しただけでの」

肝心なところは煙に巻いて話す彼が、珍しく饒舌だったあの晩、

「…思えば、あれが始まりだったわい。あの異質な存在感と…神だか悪魔だか…到底、人とは思えないほどの雰囲気纏ってあった…」
確かに…そう言っていた。

（神だか悪魔だか…それほどの人物…開眼…そして、引退した理由の…もう一度出会ったのであろうその存在……。くそっ、私の人相よりも気になるなあ…）

すでに聞いてしまっている…絶対に当たるであろう、私の人相占い。それは芳しいものであった。私の心は、すでに未来予測には満足していて、彼に対する知的好奇心だけが残っている。

意外にも、彼は私の質問を待たずと言った。

「そんなに焦らすもんでもないわな。引退した今、秘密にすることもない。オカルト好きのお前が好きそうな話じゃな」

言って、

「かつつか…、冥土の土産じゃな。何から知りたい？」

乾いた笑い声とともに、彼はそう付け足した。

「メイド…？爺…、縁起でもないことを言つなよ…」

それを聞いた彼は微笑して、運ばれてきた大ジョッキを手にした。

私は目を細くして、聞いた。

「何があつて…その慧眼を身につけた？」

彼は眉をしかめて答える。

「なんじゃ？お前も占い師になりたいのか？…止めとけ止めとけ。ロクな最後にしかならんぞ」

言って、手羽先を頬張る。

「…おぬしはわしと同じ人種じゃい。人を深く勘繰ると、不幸になる人種なのよ。感じとろう？わしとここまで長く仲良くやってこれたのは、同じ人相にある人間だからなんじゃ」

「安心しろ。あるのは知的好奇心だけだ。この年になって、今更占い師なんかやらんわ。爺さん…誰と出会って、何を学んだ？」

「わしが占いを始めたのは、おぬしより年をとってからじゃがのう…」

彼はしわしわの顔をさらにしわくちやにさせた。

『お前、ホレ…。新聞社勤めだったら知つとろうが？…あつこの教祖様じゃ。…氷川の「深い森」のこと知らんか？』

「深い森」…前田千歳という女性を教祖として、熊本県は八代市の氷川の山中で、自給自足で暮している…総勢五十人ほどの新興宗教団体のことだ。

「そうか…あの白い女が絡んでいたのか」

彼は意外そうな顔をして、

「なんじゃい…？会ったことがあるのか？…ああ…そうだったか」

「学生の時に…一度だけだな」

あの透き通るような白と、異様な空気感が脳裏に甦る。あれか…あの女が絡んでいるのなら、どんな話でも頷ける。

「わしはな…あの白い女が子供の頃に一度会ったことがあってな。その時はまだ…そこまでのもんを見抜けなかったが、二度目に会った時…、その目の奥にあつたもんを盗んだんじゃよ。そして、世界の理を彼女から学んだ。…わしやその理を必死で学んで、彼女の眼の奥にあるものを自分も宿そうと、そう思つて実行しただけじゃ」

言って、付け足した。

「そりゃ…物理的には人間じゃい。だが、中身の方は人間をゆうに超えとる…。おぬしの言うとおり、人外と表現しても差し支えないわな…ありゃ」

そして、爛された酒を一口、ズズ…と飲んで続けた。

「もしも、…また会いたいと思うんなら止めておけ。どうしてもというなら…人を介せ。おぬし以外だったらまず人畜無害…。わしやおぬしと同じ相は、なかなかおらんからな」

彼の目はいつになく真剣だった。これは外れない…。素直にそう思った。

私は息を飲んで、もう一つの質問をする。

「なぜ店を閉めた？」

彼は熱燗もビールも飲み干して、赤い顔で遠い目をして言った。

「見たからじゃよ。もう一人の人外のものをな…」

「ついこないだ、何の前触れも無く…年上の男と二人でわしの店に来おった、若い…娘じゃったわ。目だけで語るヤツだった。正直…目と思考そのものが深すぎて、わしじゃ読みきれなんだ…。白い女とはまた違う感じでな…いやはや、とにかく…驚いた」

彼は、いやに神妙な顔つきでそう語った。

「…若い女？」

「ああ、奇抜な格好の女だった。ランドセルみたいな赤いカバンを持ってな。見た目は常人なんだが…、話し振りが…いや、やはりきやつの目も、そこから知れる思いというか、態度というか…それがなあ…」

爺の話はそれから少しだけ続いた。

私はカードで支払いを済ませ、飲み屋を後にした。爺は、

「おい、人生は楽しむもんだぜえ…細けーこたあ考えようとすんなあ」

と言って、随分に飲まれたフラフラの状態でタクシーを拾って、帰途に着いた。

時候は、年が明けて間が無い…冬の世相を演出している。国内でも南に位置する熊本市といっても、この時期の身震いする肌寒さは他県のどことも変わらない。雪こそ降らないが、息は白く、あまり外に長くは居たくない。が、夜はすっかり更け、雑踏の音もフェイドアウトしていく時…この黒の空の下、私は自宅まで歩いて帰ることにした。そういう気分だった。

元々…化け物だとか、鬼だとか、神だとか、悪魔だとか、すべては人間の在り方や、それでなくとも…人間に起因することが圧倒的に多い。

キリスト教の神であるイエス・キリストは人間であつたし、生きながら仏となつたお釈迦様だって、物理的には人間だった。MONSTERのヨハンだって人間だったし、昔話に出てくる赤鬼も、西洋からの渡来人だったという説がある。

そういう異質な存在は、たとえ科学的には人間でも、印象的には人外になる。そして、この現代においても、今日のような宴席の四方山話に尾ひれがついて、人々の噂となり、四方に広がっていく。そう、人の恐怖心や興味心のようなものを喰らい、人々の心にある… 畏怖される存在だけが大きくなっていくのだ。

しかし、稀にその人々が噂する… 想像する人外の姿を、実像が大きく上回るといふ例があることを私は知っている。

私は、藍老爺の人生を変えた白い女… 前田千歳という宗教団体の教祖と会って、一言二言話したことがある。猟奇殺人があつた直後の現場で…。あの時の印象は、私自身の中で畏怖され、誇大化している可能性もあるうが、後に聞いた彼女の数々の噂が、私の心象のモノを上回ることは… ただの一度も無かつた。

「…くらした、あずさ…か」

藍老爺は、自身を引退させるに至らせた… もう一人の人外のモノの名をそう語った。そして、

「白い女と同じじゃ… おぬしは絶対に会ふな。会ふのであれば人を介せ…」

とも。

私は新聞社に勤務して十年ほど。年齢の割に、そこその位置まで登り詰めた。そしてここに至って、自分の趣味でやっている、オカルト季刊紙「不思議な女の子」を中心とした出版社を立ち上げ、それで独立したかった。藍老爺は、

「…おぬしは未だ帝王の相を持つてゐる。何をやってもそれなりの成功はするじやろうよ…好きにやればいい…」

そう言っていた。

「…決めた。その、くらしたあずさを取材して…次号に載せて、それが叶うようなら、独立案を具体的に詰めていこう」

この寒空の下、私は藍老爺の話を反芻するようにして、自宅まで歩いた。白い吐息を宙に舞わせながら。

彼の訃報が届いたのは、それから十日も経たないうちだった。川縁で釣りをしていたところ、複数の中学生に暴行を受け、川に落ちて溺死したという。

(…なんと、無残な…)

仕事中だった私は、警察からの連絡に目頭が熱くなるのを必死で抑えた。

さらに数日を経て、少しは落ち着いたか…という頃、思考が勝手に色々考える。

(…あれほどの人物が自分の最後を見落とすか?…いや、予見して

いたはず…。引退…。待ち時間…。冥土の土産…。自分の占いの秘密をぺらぺら喋ったのも…。今なら領けるな…)

(白い女の目の奥にあったもの?…世界の理って…なんだ?…?…
思えばあれが始まりだった…???)

白い女には、もう会いたくないし、藍老爺にも会うなと釘を刺されている。くらしたあずさの方も同じ…。いや、どうだろうか…。取材すれば…。私も暴行を受けて殺される運命を辿るのか…??

私はぼんやりと…。形を定められない雲のような、ふわふわとしたことを考えていた。いかにオカルト好きで、マンガみたいな…。突拍子も無い解釈の余地を与えられている私の脳みそであろうとも、彼の一生を想像できるには至らない…。

「好きな食べ物、後に残すタイプだしな…。私は」

一步一步、気になることは時間をかけて、少しずつ詰めていこう。
私はそう思って、職場のデスクに顔を伏せて泣いた。

人で在って、人で無いもの（後書き）

早速再登場しているのは洋香姉さんです。前作では脇役としての登場だった彼女ですが今回は??乞うご期待です。なお、連日更新ではなく毎週月・木更新になっております。一回分の文字数は前作の倍以上になりますのでガッツリお楽しみください。

第一話 人格の裏側 vol.01（前書き）

前作は2,000〜3,000字で更新していましたが、今作は6,000〜7,000字程度で更新していきます。読みやすいといいいのすけれども。あずさんは前作ほど前には出てきませんが、果たして…。

第一話 人格の裏側 vol.01

第一話 人格の裏側

どこかで何かが狂ってしまったのだろう。そうでないと、この現状は到底説明できそうにない。

普通、十六歳で女と言えば女子高生…学園生活、恋に、部活に、勉強に、友達と遊んでは好きなことに没頭し、無限に広がる将来を夢見て……そういう日々を送っているはずだ。だがここにいるあたしの生活には、そのどれもが存在していなかった。あるのは暗くてジメジメとした自己嫌悪、疑問、後悔、懺悔に満ちた生活である。と言っても、それほど大げさに捉えているわけでもない。が、まったく悩んでいないわけでもない。

あたしは、友人とルームシェアすることで住まいをなんとかして、年を誤魔化してはクラブのホステスとして働いて、そうして衣食を整えていた。夕方の街を出勤する時、楽しそうに友達と連れ立って歩く、同年代の女の子たちを見る度に思う。何がどうなって…何が原因で、あたしはあっち側に行けなかったのだろうか、と。

そして、羨んで…どうしようもないことだと悟っては、自らの運命を恨む。ひたすたに悔やむ。いや、それだけならまだよかった…。不規則な生活と不健全な職場、不安定な立場は、あたしを精神的にも身体的にも、徐々に徐々に…蝕んだ。

人生について考えると…ロクなことがない。ルックスがいいことだけは救いだっと思う。物心ついた時から、なにかと鈍臭いあたしは、どれだけ仕事でミスを犯しても、平均より高いルックスのおかげで救われていたように思う。水場はルックスとトーク、人当たりや態度、飲酒量なんかが命綱となる。あたしはルックスのみで仕事を行っているようなものだった。

「お酒も飲めなくてトークも上手く回せない。おだても出来なきゃ、皿は割るわ、酒は溢すわ。そんなんでやってけるのはメイ…アンタくらいのものよ」

「…でも憎めないのねえ。ほんと、得するキャラクターってあるよねえ」

これは店長談。彼女はあたしにとても良くしてくれる。

キャラクター…人にはそれぞれの性格というものがある。テキパキした人、のんびりした人、気性激しい人、天然な人、明るい人、面白い人、鈍臭い人、マイペースな人、猫を被る人、周りに気を使う人、社交性が高い人、優しい人など。どれもが性格に由来されてそれを表現した言葉であろう。

あたしは自他ともに認めるマイペースな人、鈍臭い人、のんびりした人、おっとりした人…そんな部類に入るだろう。けれど、このどこかが狂ったような人生を流れてきたせいで…少しは強くなった気もしていた。どこが、とか…具体的には言えないけれど。

小さい頃から…あたしはいつも誰かの後ろに隠れていたように思う。だけど今では、自分の食い扶持を自分で稼いで…生き抜いている。なんとかやっていっている。この今の自分の在り方は、ほんの

少しだけの自信となって、弱々しい自分の性格を助けてくれた。
心の奥底で、

（もつと強くありたい、自分や周囲の大切な人を…自分自身の力で
守りたいなんて、願いつけたおかげかなあ…）

そんなことをふと思った。

あたしは、子供の頃の何かの事故（？）が原因で、記憶に障害があった。七、八歳以前の記憶はほとんどないし、最近の記憶でさえも、些細なことはすぐに忘れてしまう。大切なことですら、強く心に思い描かないと…不自然なほど早いうちに頭の内から消えていつてしまう。印象強いことになって初めて、薄っすらとなりながらも確かに頭の中に残ってくれる。幼少期の記憶など、例外と言えるほどのわずかな数しか…保持できていなかった。

このあたしという人格を形作る性格だとか、記憶だとか…そういった脳みその中のこと…難しいことはわからないけれど、あたしという人格はきつと…脳みその中にある何かで出来ている。

あたしは、あたしがあたしでいるために、人格に纏わることを何より大切にしている。記憶…それは、あたしの中で素晴らしければ良い思い出となる。今体感している嬉しいこと、悲しいこと、楽しいこと、寂しいこと…色々な体感のほとんどが、障害のせいでいつ消えてなくなるかわからない…そういった憂いが常に頭の中にある。そして、そこには…この憂いそのものすら消えてしまわないかという怖れもあった。

現存している記憶…。あたしの父のことなどは、記憶の奥底に刷

り込まれている典型的な例だ。

彼は一言で言うと、狂人だった。十年以上前の話で…断片的の曖昧な記憶だけど、確かに鮮明に脳内に残っていることもある。父は、あたしが五歳だか六歳だかの頃に、一家を全滅させて、自ら命を絶った。あたしはその時、その場所にいたらしいが、その記憶は残っていない。

後に引き取られた親戚の家の…義母が言うには、仕事から帰った父は、玄関でいきなり、あたしのお兄さんを包丁で刺し殺し、お姉さんの部屋に行つて、彼女を切り裂いて…その次にあたしを絞め殺そうとした。そして、凶事に気付き、それを止めに入つた母を刺し殺した。あたしは母のおかげでなんとか逃げ出せて…近所の人に保護された…らしい。その後…どこかへ逃げだした父は、どこぞで自殺した、と聞いている。

細かい記憶はない。だが、あの時確かに…良くない何かが起こつたという記憶は、鮮明に脳内に存在している。

父は仕事一筋で…寡黙な人だったが、一旦怒りだすと大変なものだった。母に関しては…あまり記憶はないが、とても穏やかで優しい人だったと聞いている。

…殺人鬼の血が流れている。このことは、世間があたしを遠ざけるのに十分な力を持っていた。親戚の家で育てられたはいいものの、近所の人はもちろん、その親戚家族の人からも、後ろ指を指される始末であつた。

あたしが住んでいたところ、熊本県益城郡は九州にある片田舎。そついった噂はどこに行つても払拭されることはなく、どこからと

いう訳でもなく、簡単に漏れてしまい、ひたひたと後を尾いてまわる。事件のことがよぎらないまともな人付き合いは、皆無に等しかった。

このいびつな家庭と、周囲の環境の有様に耐えられなくなったあたしは、義務教育が終わると同時に、家出同然に出て行く。そして、水商売に就職して、本名を隠し、髪を金に変え、厚くメイクを施し、姿形を変えて、素性がわからないよう…たとえバレても、動じないような人間ばかりがいる環境に身をおいた。

世間から遠ざかり…出会う人々から、事件のことだけでなく、鈍臭い自分の素顔をも隠した。そうやって、自分で自分を疎外という脅威から守ってきた。

この業界は裏の世界と表の世界を行き来できる…出入り口のようなもの。人生に何かが起こって、仕方なくここにいるという人が、ほとんどであった。そして、その中の半分ほどの人が、この世界から脱却したいと願っている。

あたしや、あたしのルームメイトもその内の一人である。あたしは、あたしの中の殺人鬼の血を抜いてしまつて、すべてを入れ替えてしまいたい。父の犯した罪は、決して消えはしない。あたしだけの納得でもいいから…せめて、あたしの中を流れている血だけでも、浄化してやりたい。そして、できることなら、一人の人間として、普通のお仕事をして、普通の生活を送りたい…。それは、いつの間にかうつすらと掲げていた…生きる望みでもあり、目標でもあった。

あたしは、今自分にある現実を見据えて考える。しかし、いつだって…いつ考えても…その夢を実現できるだろうと思ったことはなかった。

この商売はとかく体調を崩しがちだ。未成年なのに…かなりの飲酒量になるし、味付けの極端に濃い料理を毎晩客に付き合つて、笑顔で飲み食いしなければならぬ。たいして酒に強くもないあたしは、すぐに倒れてしまうし、いつだって二日酔いで…、オフの時間のほとんどは、頭痛や吐き気との闘いだつた。

そんな中…異常は些細なことから始まつたのだと思う。思い返す限りの一番最初は、あたしって寝相悪いんだなあ…って程度だつた。

朝起きると、頭と足の位置が逆になってたり、ベッドから落ちたりしていた。ルームシェアしている友人たち…カヤやマキに聞くと、寝言を言つたり、夜中にごそごそと動いたりしているらしい。でも、誰だって寝返りくらい打つだろうし、寝相が悪い人だって多くいるだろう。寝言だって…誰しも言うときは言うはず。そんな程度のことだと思つていた。

それからしばらく経つと、寝相という問題ではなく、夜間の記憶がまったく無いという…いつもあるような記憶の障害が、強く頻繁に起こつた。カヤの話によると、トイレに行つたりしてるし、朝方に飲み物を買いに外へ行つたりしてるらしい。カヤと話したりもしているようだが、そんな記憶はまったく無い。

さらにしばらく経つと、飲みかけのペットボトルがベッド脇に置いてあつたり、お金が減つていたりして…、マキから、

「昨日の夜??ずっと昔話とか愚痴話してたじゃん。あんた、酔つた時のキャラ変えたの?あれ客受けしそうに無いよ?」

なんて報告を受けるまでになった。でも、あたしはそれにも特に驚かなかった。なぜなら、飲酒量がその人の限界を超えると、性格が変わったり、記憶が飛んだり、爆睡したり…そういったことは、ままある出来事だからだ。

酒に弱いあたしにとって、職場での飲酒量は常々気を失うほどになる。帰宅する頃には、ぐでんぐでんになっていることも珍しくない。記憶が飛ぶこと、それは子供の頃の記憶でもそうだし、あたしにとってはことさら異常なことではない。ましてや酒を大量に飲んでいる状態ならなおさらだ。だから、大した問題だとは思っていなかった。

しかし、さらに幾ばくかの月日が過ぎると、夢遊病ではないかと思えるほどの…そんな症状が明らかになった。

夜のあたしは、人を探すとカヤやマキに言うては、外に出て…街を徘徊して、数時間は帰って来ないんだそうだ。さらに、それはお酒を飲んでない休日の日、完全にシラフの時にも起こったりしてる。

この時点で初めて、あたしは何か…あたしの体に何か極めて異常なことが起こっているのではないかと、懸念した。カヤやマキもあたしの体調や行動のことを心配したが、なんとか誤魔化しては…日常を送っていた。

しかし、まだ毎日というわけではないが、その回数は徐々に増えていき、意識外で動いている時間も長くなっているようだ。カヤとマキも少しずつ、あたしの異常や記憶の欠落に気付いていた。

「メイ、最近あんなにかやばくない？っていうか、いつ寝てんの

よ？…お酒入ってんのに、あんな睡眠時間でよくやるわよね」

それを聞いて、マキも相槌を打つ。

「そうそう、あんたちつとも寝ないよねー。っていうか人探し？？
…名前しかわからないんでしょ？そもそもなんでその人探してんの？」

「そして夜中のあんた、ご飯美味しそうに食べるよね。普段全然食べないくせにさ」

「そうそう、キュウリなんて絶対食べなかつたくせに。んで、あんたって夜歩く時なんだかぎこちないわよ。変にふらふらしててさ…」
「そうそう。あれで夜歩かれちゃ危ないわよ」

二人とも好き勝手に言っちゃって…あたしはその場を取り繕うにして答えた。

「わかったわかったってば…きつとお酒のせいかな、寝ぼけてるせいだよ」

二人とも呆れたような顔をして、あたしの言葉を聞く。

「真夜中は別の顔…ね」

カヤは両手をすくめてそう言った。

寝入った後に起きてくる、あたしでないあたしは、どうも誰かを探しているらしい。名前しかわからない誰かを。カヤもマキも、その誰かさんを探しに出ていくというあたしの言葉を聞いている。あたしがことさら普通に出て行くだけに、彼女らはまだあたしの異常が深刻だとは思っていない。もっとも最近まであたし自身が、それ

を異常だと思っていなかったのだけれど…。

あたしもカヤもマキも、勤めている店は違うものの、店同士は近所で、いずれもクラブである。三人とも年を誤魔化して働いているが、店長や経営者などにはバレているだろう。化粧や井手達こそ派手にしているが、すっぴんになると三人ともまだあどけない、年相応の顔立ちだった。

カヤもマキも、そしてあたしも、深くこそ話さないが、それぞれ人生になんらかの支障があつて…特殊な事情のもとに現在があるということを理解していた。そこには、あえて触れないし、お互いの話もしないけれど…もしも話すのなら親身になつて聞く…という暗黙の了解というか、そういうある程度の信頼感がある空気があつた。

それぞれに特殊な過去があるのだろうという気持ちだが、お互いの信頼感へと繋がっていったのかもしれない。何気ない世間話、好きな異性のタイプの話、メイクの話、将来の夢、今日来たお客さんの話、嫌いな上司や同僚の愚痴…そういった話はいつでも盛り上がる。だが、三人共に生い立ちや過去の話はほとんどしないし、尋ねもしない。そこに互いの気遣いがあるんだな…とわかる。

三人の共同生活…下手糞な料理を作つて、ワイワイガヤガヤ食べる食卓、二人とも掃除をしないと云つて愚痴るカヤ、カヤのお風呂の時間が長いと云つて愚痴るマキ、テレビのチャンネル争いになったり、折半している家賃や水光熱費を、払ったの払つてないのと言つてケンカしたり…三人共に、異常な日常を脱却したいと常々思つてはいるが、それでも楽しいと認めざるを得ない時を過ごしていた。

あたしとカヤとマキの青春時代…こんな悲慘な現実でも笑つて暮

らせてる。ちゃんと青春はある、まったくの暗闇ではない…と思う
貴重な体感だった。

あたしの店に昼の営業は無い。夕方の五時くらいになると仕事に出る。帰ってくるのは三人共に明け方だ。それから寝て…お昼過ぎに起きて、だらだらしては仕事に行く。店はほぼ無休でやっているが、店員には月八日、九日の定休がある。こうしてお金を貯めて…いつか他のちゃんとした職業に就くか…誰か良い人を見つけて結婚する…そんな目標があって初めて、この現実を生き抜ける。

「わたしはね、運命の人っていうかさー、自分とぴったりくる、しつくりする…一緒にいてぎこちのない男見つけて結婚するんだ。貧乏でもいいし、子供も産んで、教育ママになりたいの」

カヤはペットボトルの水を飲み干して、手足をぐぐいと伸ばして、欠伸しながら言う。今日は三人とも帰りが一緒だったため、寝入る前の話に花が咲く。時刻は朝の五時…季節は冬に入ったところ…、辺りはまだ真っ暗だった。

しかし、結婚して教育ママとは…しつかり者の彼女らしい。彼女はいつだって現実を見据えて、正面から立ち向かっていた。現実を見据えて夢を見る。叶わない夢は見ない。それが彼女の座右の銘であり、信条でもあった。

マキは彼女とは違う。

「カヤの夢は現実的で面白くないよ、もっと夢見なきゃ。夢ってくらいだし、現実ではできないようなこと考えなきゃね」

そう言う彼女の夢は、デザイナーになることだ。デザイナーになって、そこそこお金持ちの男と結婚して、玉の輿になること。この二つは、彼女が日頃から口癖のように言っていることだった。そこそこお金持ちという辺りに、彼女のちょっとだけ現実を見据えた痕跡があって笑えてくる。

「夢は大きいほど、見甲斐があるじゃん」

彼女はそう言ってニンマリと笑う。カヤは、フン…と腕組みをして、不機嫌そうにした。

あたしの夢…まず実現不可能であろう夢…は、この殺人鬼の血を洗い流して、普通の生活を送る女の子になること。…殺人鬼の父のことなど、二人には口が裂けても言えなかった。あたしの夢は過去を話さずには語れない。あたしはきまって、

「夢もなくはないんだけど…ま、カヤの夢に近いかなあ。あたしだって普通の…人並みの生活がしたい」

とだけ答えて、具体的なことについてはいつも流していた。二人とも深くは聞いてこない。いつだって、その気遣いに感謝してる。

将来のヴィジョンの話は、テレビに映っているお天気キャスターの服装の話へと移っていく。そして、誰からともなく自室へと帰り、新聞配達の前付バイクの音を耳の遠くに置いて、深い眠りに就こうとするのだった。

寝入る前におぼろげに思う…何かが記憶の片隅に引っかかる感じがした。大切な何かを忘れていて、それを思いだしそうな…そんな感じ。心配だとか懸念だとか…、もどかしいそんな感じは、薄っす

らとだが、確かにあたしを不安にさせた。

酒の酔いのせいか、わずかな物音が頭に響く。あたしはベッドにごろんと横になって、二日酔いの頭を静かに両手で撫でまわしながら、すうと眠りについた。

「さ、寒い…」

あまりの寒さに体を起こすと、そこは下通りの裏手だった。

熊本市の中心街には上通りと下通り、新市街がある。近隣には熊本城や市役所などもある、日本で一番横幅のあるアーケード街だ。下通りの西側裏手には、あたしやマキ、カヤの働いているお店や、他の店なども多く立ち並び、飲み屋街がある。あたしはその通りの…街路樹の下で寝ころんでいた。辺りはまだほんのりと暗く、人通りはほとんどない…。

第一話 人格の裏側 vol.01（後書き）

この話の主人公は源氏名でメイさんという方です。非常に難しい環境下で育って、独特なものの考え方をする人なんですね。行動にする考え方にしろ、新しすぎたり古すぎたりして現代常識にそぐわないことでも、偏見なくやってのけるという性格です。自分に合う合わないか、とりあえず試してみたら…という好奇心があるということでしょうか。

第一話 人格の裏側 vol.02 (前書き)

熊本と言えば、こむらさきというラーメン屋さんの餃子が異様に美味しかったことと、その近くのウッドペッカーというCD屋さんの年末セールでアホほどCDを買っていたことを思い出します。両店ともまだあるのかなあ。あるといいなあ。またその近くには(すごい街中なのに)すごい古い神社があつて、中で合気道をやってるんですよね。傍目で見えました。

第一話 人格の裏側 vol.02

（たしか昨日は…カヤやマキと話してて…五時過ぎにベッドに……）

（腕時計…外して寝たはずなのに…）

外したはずの腕時計を見ると、時刻はまだ五時半であった。冬の暗さのせいと、針表示のアナログ時計のため、朝か夕方かわからない…でも、この人通りの無さからすると、朝方に間違いない。

「ど、どうなってるの？もう…こんなの寝相が悪いつてレベルじゃないよ…」

ぶつぶつと文句を言いながら、コートに付いている枯葉やチリを払う。そして、自分がわざわざ服を着替えて、厚着をして出て来ていることに気付く。

「??…ちゃんとパジャマで…寝てなかったっけ??？」

しかも、服装はタンスにしまっており、普段は着ないものばかりであった。いざ買った方がいいも、デザインが地味すぎて…店にも外にも着て行けなかったものだ。しかも、タイツも靴下も履いてないのにブーツなんて履いてる…。

「よりにもよって…なんでまたこんな格好で外に出たんだろ…」

クシュン！クシュン！と、二度くしゃみを繰り返して、マンションに帰る。まるで乱暴された後のように乱れた小汚い格好で、ふらふらと部屋まで戻った。

部屋に戻ると…まだ寝ずに自室にいた力ヤが、コーヒーを入れてくれた。

あたしは意を決して、最近のこの夢遊病…歩き回っている記憶が無いってこと、そしてたった今しがたのことを話すことにした。

「……あんたもうそれって…夢遊病を通り過ぎて、二重人格って感じじゃん」

彼女はさして…驚く様子も退く様子も見せずに、コーヒーをすすって、

「だって、記憶が無いって…いつも普通に会話できてるよ。ハハッ、そういう確かにあんたっぽくない時があるかも？」

二重人格？？確かに、まるで知らない誰かが、あたしの体を使って何かを行っている、と考えた方がいくくらいに…寝入っているあたしは、あたしの知らない何かを的確に行っている。服を着たり、飲み食いしたり、街に出ては誰かを探したり。

「なんだったかなー？？名前…」

コーヒーのおかげですっかり目が覚めた力ヤは、うつんと背伸びをして言った。

「しばらく前にあんたが外に出て行く時、あたしに名前を聞いてきたのよ」

「岩下だったか、倉田だったか…なんか女の名前を言ってたわ、そ

いつ知らない？って言ってたわよ、あんだ」

「なんて言ってたっけなあゝゝ」

……岩下？倉田？まったくもって記憶にない。寝入ったあたしは、あたしがまったく知らない女を探している？

「あー、なんなのよ？？眠れやしないわ」

ボサボサのウェイブがかった頭を、カチューシャで後ろにまとめ上げながら、マキが部屋から出てくる。彼女は眠りが浅く、部屋はリビング隣の和室なため、リビングで話をしていると、いつも不機嫌そうに起きてくるのだった。

「たった今寝入ったばかりだったのに…もうゝゝ！！」

彼女はブツブツ愚痴りながら椅子に座って、

「私にもコーヒー頂戴な」

と、カヤに催促した。

「はいはい。言われなくても淹れたげるわよ」

そう言って、カウンターキッチンの向こうへと歩く。

「で、そんな面白い格好して何の話？」

あたしの格好を見て笑いながらマキは言う。カヤが目の色一つ変えずにあたしの話を受け入れてくれたおかげか、話を打ち明けるこ

とへの変な抵抗感は無くなっていた。あたしはため息交じりで答える。

「…なんか最近変でさあ。あたしの夢遊病の話ー。さっきさ、デルタパークの前の植木んとこで寝てたの。自分でも全然知らないうちにさ…」

あたしの言葉を聞いて、マキはキャツキヤとお腹を抱えて笑って言った。彼女はあたしの異常を確信していたに違いない。

「っはは、そりゃ傑作だわ。そんな変な格好して外で寝てたの？この寒いのに、あんたの中の人も大変だわねえ…なんとかあずさを見つけないもんねえ」

「そうそう、あずさよあずさ。くらた…あずさだったっけ？」

テーブルはマキの前にコーヒークップを置いて、カヤは手の平を口の前に当て、欠伸交じりに言う。

「ありがとー、くらただっけ？…くらしたじゃなかったっけ？たしか…くらしたあずさ…」

カヤは腑に落ちた表情をすると、人差し指をピンと立てて、マキを指差す。

「そうそう！くらしたよ、くらした！くらしたあずさよ、あんたが言ってたの！」

…くらしたあずさ…全然記憶にない。昔、あたしが知っていたはずの人だろうか。

「うーん、全然心当たりない…」

「心当たり無いって割には、何度もその名前言ってたわよ。本当に二重人格なんじゃないのあんだ??」

「ここ最近はずつとよ、何度もその人探すって…外に出てってるわよ?止めた方がよかつたのかな??」

マキはコーヒを飲みながらあたしを見た。

「さあ??でも、外に出ていくのは止めてよ。今日みたいに外に放り出されて寝てちゃー凍えて死んじゃうよ。だいたい…」

カヤはあたしの台詞を遮って言った。

「ていうか、そのくらしたあずさを見つけて、直接話を聞けばいいんじゃない?…夜のあんだが浮浪してる原因が、何かわかるかもよ」

『それにあたし何度か止めたことあるけど、あんだ「行かなきゃいけないの、探さなきゃいけないの」とか言って、けっこ強引に出てったわよ』

マキも、

「ノロマのあんだが、夜出て行く時は素早いもんね。ふらふら足取り不安定なくせにさ。スツといなくなってる時もあつたし」

などと言って、コーヒをまた一口する。

くらしたあずさ…何度か心に思うと、記憶に引がかかって、何か知っているような気もした。しかし、具体的には何も出てこない。何も思い出せない。でも人格の裏側にいるあたしは「くらしたあずさ」を必死で探している…。彼女を見つけ出して、話を聞けば…古い記憶が戻ったり、夢遊病がなくなったりするのだろうか。

「もう一人のあんたが探してる人をあんたも探す。なんかミステリーめいてて、面白いじゃない」

カヤは茶化すようにして言った。マキも、

「どっちが先に見つけるか競争ね！」

と、他人事を十二分に楽しむような口調でそう言った。

それから数週間、あたしは「くらしたあずさ」を探した。と言っても、会う人会う人に名前を聞いてみるっただけのことだ。手間も何もかけてない。客商売につき、一日に何人もの人と会う。しかし、「くらしたあずさ」を知る者はいなかった。…それもそうだ。実在するかもわからない…ただの寝ぼけた自分が夢見た、実在しない人の名前なのかもしれない…。固執するのも馬鹿らしい話だとも思った。

しかし、彼女を知る者はそれからすぐ後に現れた。ある日、ふらりとお店に来た若者二人組…明らかに場慣れしていない、とりあえずクラブとはどんなところかを体験しに来ました…という感じの二人が、彼女を知っていた。

一方の彼は、黒のコートに黒の裾の広い…まるでスカートのようなズボン、白いシャツを着ていた。黒髪は長く、ビジュアルロックバンドのミュージシャンみたいなルックスであった。顔立ちは少し濃くて、パーツがはつきりしている。綺麗な少年か青年かといった感じで、慣れていない態度が可愛くて、お姉さんが抱きしめてもいかなかったと思うたり…そんな感じの人。

「メイです！こんばんわっ！！」

言って、どうせ知らないだろうとタカをくくって、挨拶の時に付け足している台詞を言う。

「一応聞いておきますけど、くらしたあずさって、知りませんよね？」

いつもはここで、

「ん？？いきなりなんだよ？それ女の子？知らないけど、何？」

「知らないならいいんですー知り合いにいたら教えて下さいね！…あたしの片思いの娘なんです！」

「なになに？お姉さんって女の子が好きなの？」

…とかなんとか言って、話を余所に振って広げて緊張感を取る…。こんな会話が続く…はずだったが、この黒い男の子は違った。

「はい????…なんでこんなところで梓の話になるんです??？」

彼は本当に意味がわからない…といった表情で、そう聞き返した。でも泡食っているのはこっちも同じだ。

「え??…お兄さん、くらしたあずさを知ってるんですか?」

と、普通に営業の顔を崩して、思わず真顔になって聞き返す。彼はまだ、

「え…?だつて今、倉下梓って、言いませんでした??」

と、全然疑問が解消されていない様子だ。

「あ…言っただかさ…まさか本当に知っている人が現れるなんて…」

言つて、半分はネタのつもりだったんだけど…と付け足すと、彼は、

「ネタ??…はい?まったく話がわからないんですけど…」

と、さらに泡を食っているの、一から話をする。と言っても、ただ彼女を探しているということを伝えただけだが。

「梓を探してるって…あいつはただの浪人生っすから…熊本駅のトイレの代ゼミに通ってますよ」

「浪人…代ゼミ??」

あまりに縁がなくて、耳馴染みも無い言葉のため、すぐに単語を繰り返して聞き直すことになる。

「そうっす。つっても、あいつはほとんど講義に出てこないっすからねえ」。駅前の植え込みの傍で待ってた方が、現れる可能性高いですよ」

言って、怪訝そうな顔でこっちを見て、

「ああ、つても最近は植え込みントコでもあまり見ないっすね…でも、駅前探るのが一番手っ取り早いと思いますけどねえ…」

もう一方の彼…黒い男の子の横にいる、パーマがかった髪の長い…こちらでも何か音楽でもやってそうな、背の高い男性が話を遮って言う。

「ていうか、なんでここにきて梓の話になってんのかわかんねーよ。梓なんてどうでもいいじゃん」

言って、あたしの方を向き直る。

「お姉さん！仕事してよ、し・ご・と！梓は熊本駅前をはってれば捕まえられるぜ。赤のランドセルみたいなカバン持つてる黒髪の女が梓だ。それでいいんだろ？」

パーマの男性の歯切れ良いセリフは、あたしを我に帰らせた。そうか、仕事中だったっけ…そもそも会ってみたところで、どうにかなるって話でもない。「くらしたあずさ」については…彼の言うとおり、どうでもいいんだけど…仕事はしなきゃいけない。

「ごめん、ごめん！ただ聞いたただけなんだー、今度駅前探してみよ！ありがと！っていうかさ、何飲みます？ウチのお店は初めてですか？？」

言って、あたしは営業顔に切り替えて話を進めようとする。

（お姉さんかあ…でもたぶん…あたしのが年下だったりするんだよなあ…）

などと思いながら。

「へえ」

カヤは興味なさそうに相槌をうつた。マキは、

「そっぴゃあんだ、昨日も出て行つてたわよ。面倒だったんで話かけてもないし、後尾けてもないけどさ」

と、ははつと笑つてそう言った。見てたんなら、出て行くのは止めてほしいよ…たく。

あたしが夢遊病のことを打ち明けたせいか、最近の二人はあたしの奇行にもまったく動じない。マキはリビングをクイックルワイパーで磨きだした。あまりにもガサツで不潔なマキは、カヤに強制的に掃除させられていた。

「もっと腰入れてやりなさいよ！埃が取れたら雑巾がけもやるんだからね！！」

マキは眉をしかめて、

「ひひひん、お母さん助けてー」

などと言いながら、せつせと床を磨いていた。

「でもその客、熊本駅前だつて言つてたんでしょ？」

リンゴを剥きながら、こっちに目線を合わせることなくカヤは言った。

「手がかりあつたんだから、行つて探してみればいいじゃない」

ほい、と綺麗に切られたリンゴが目の前に出される。

「そうなんだけどさ……探して会つたところでさ……なんて言えはいのよ」

「一目惚れしました。私と付き合つて下さい！って言えはいいいじゃん」

マキはマイペットを床にふりながら……彼女も目を合わせることなく言う。

「なんてことないわよ。寝ぼけたあたしはあなたを探しています。私に見覚えはないですか？つて、言えはいいいんじゃないの？」

リンゴを頬張りながらカヤは言う。それは本当のことだけでも……。あたしの表情を見て気持ちを察したか、カヤは、

「事情が複雑な時ほど、本当のことを正直にシンプルに話すもんなのよ。私はそうして人生の難所を乗り切ってきたわよ」

と、冷たい口調で言い放った。どこか遠い目をしているところ、なにか昔のことでも思い出しているのかもしれない。

カヤの年は知らないが、あたしより少し上くらいだろう。あたし

やマキよりも、よっぽどしっかりしている彼女は、どこか悲しげで、悟りきった顔をする時があった。それだけ何か…特殊な事情が人生にあったんだろうね、とマキと話したことがあったけど…それも納得できてしまうような表情…。ふと…空気が真剣な感じになった…のも束の間、カヤは、

「ほら、手が止まってるわよマキ！…あんだ、そんなにトロトロやっ
ってちゃーご飯食べらんないわよ！」

言って、

「キッチンだって掃除するんだからね！」

と、付け足す。マキは今にも泣き出さんばかりの顔で、

「ひーん、キッチンはまた今度にしてよ〜」

と言った。かれこれ三時間は掃除している。…にもかかわらず、ちつともキレイになってない気がする。カヤは、

「別に損があるわけでもなし。行って探してさ、会えれば話すればいいじゃない。案外顔見知りかもよ。あんたはその子覚えてなくても、向こうは覚えてるかもしれないじゃない」

と、言ってくれた。そして、

「いい結果になるといいわね！」

と、笑って言ってくれた。

JR熊本駅。他県から熊本へ来る公的交通手段は、バスもあるけれども、飛行機がJRがほとんどになる。飛行場は大変に遠くにあるため、使用者はJRと二分される。近頃は新幹線開通の話が世間を賑わせているも、具体的な日程の目処は立っておらず、県庁所在地の駅であるにも関わらず、未だに自動改札にすらなっていない。

それでも駅前には、さすがに少しは開けており、ホテルはもちろん、ファーストフード店やお食事処、バス停、ゲームセンター、予備校、パチンコ、交番、と一通り揃っている。

JR熊本駅は、熊本市の中心街を貫いて東へと抜けていく熊本市電と乗り換えが可能なため、社会人はもちろん、通学で市電を利用する学生も多く行き交う。一つのターミナルとなっている。もちろんバス停もあるし、タクシーも多く停まっている。

いざ来てみると、田舎の駅とはいえ、駅前の人通りはそれなりに多い。この中から見たこともない女の子を探すのは至難の業だろう。

「恰好は……奇抜だからすぐにわかるって言ってたけど……」

先日の会話を必死で思い出す。黒い男の子とパーマの男性の名前。聞いたはずなのに。名前が思い出せない。彼らは、あずさは赤いランドセルのようなカバンと、黒い髪、頑強な編み上げブーツ、それらがトレードマークだと言っていた。目立つ格好をしてる女だから、一目でそれとわかるはずだ、とも言っていた。また、駅中央にあるエスカレーターの前の植え込みのそばに多い。とも言っていたが、その植え込みの近くに。それらしい女性はいない。年は。十九歳……。

「あたしより三つも上だ…。実際見つけたとして、何を話せばいいのかなあ…。そうだ、忘れないうちにメモに取っておこう」

仕事を始めてから、大切なことはメモを取る習慣がついた。すぐに記憶がトんでしまっても、これなら大丈夫だと思っではいるが、メモの内容がまったくわからないこともしばしばあったし、メモを取ることもそのものを忘れてしまったりすることもあった。

二日間の休日を潰して来てみたが、とても見つかりそうにない。

「おつ、メイさん?？」

ふと後ろからあたしを呼ぶ声がする…。振り向くと、

「あらら、本当にメイさんじゃないっすか…。何してるんすか?こんなところで?？」

「…ひょっとして、マジで梓を探してるのかい?」

と、そこには黒い男の子とパーマの男性がいた。

第一話 人格の裏側 vol.02（後書き）

JR熊本駅も再度登場です。新幹線の開通に当たって、駅前は全面リニューアルされたようですけども、この話は1999〜2000年くらいのものなので、JR熊本駅はリニューアル前の景色を思い浮かべて頂ければ幸いです。ご存知であればですけども。しかし、あの雰囲気が無くなったなんてショックなものです。

第一話 人格の裏側 vol.03 (前書き)

ひどく物事を忘れてしまうというのは、認知症という病気で現実にあるものなんです。実は「あずさ」のシリーズで老人ホーム編という企画が挙がっていたことがあります。認知症や現代社会のしがらみや問題を主題とした話だったのですが、プロットの時点で極めて暗くなったので没案となりました。忘れるという設定だけこの「人格の裏側」には残っていますが、好きなことは覚えていて、辛いことは薄っすらと消えていく、忘却という人間の機能は幸せな元なのかもしれません。

第一話 人格の裏側 vol.03

この間とは違う服装だけれど、今日もやっぱり黒い服だし、パーマの男性の方も変わらずかつこいいままだった。名前……を必死に思いだそうとしながら、メモのお客さん欄をチラリと見る。そこには日付と共に、緒山くん、沼ちゃん、二十歳、二人とも浪人予備校生、都市部の大学を目指している……などと書かれていた。

「あー、…緒山くんと沼ちゃんだあゝ、こんにちわ！」

なんとか思い出せた、正しいはず……。彼らは笑顔を返してくれる。

「あれ、なんか名前、迷って無かったっすか？覚えてくれてなかったんすか？？」

緒山くんの鋭い指摘に泡を食っていると、沼ちゃんが助け船をくれる。

「常連でもあるまいし、メイさんもお客さんは多いだろうし…そう言うなって。だいたい一回行っただけじゃん。まあ、盛り上がったけどね」

彼らはそう言って笑った。なんか…とても久しぶりに…お店の外で人と会話したせいかな…幾分か緊張してる自分がいる。

「あのさ、その、本当にあずさ……梓さんを探しているんだけど…今日は見てない？」

「あ、やっぱそうなんだ？でも最近はなあ…」

沼ちゃんが残念そうな顔でそう言う。

「あいつ、彼氏ができてから全然見なくなっちゃったんすよ。ちょっと前までは、あそこの植え込みのところに何時間も座って…前通る人を見てたんすけどねえ」

緒山くんはそう言つて、五十メートルほど先にある…エレベータの前の植え込みを指差した。

「そうそう、人間観察…。っていうか、彼氏って家木くん??あの二人付き合つてんの?」

「じゃないの?いや、よくは知らんけど…たぶんそうでしょ」

「へー、あの梓がねえ…」

「いや、いつも一緒にいるから勝手にそう思ってるだけなんだけどさ」

「あー、そーいやマジでいつも一緒だよな…」

二人は、あたしが知りもしないあずさの話をしている。どうも最近はこちらには現れていない様子…。

「…やっぱ最近はこちらには来ないんだ?うーん、また出直してくることにしようかな…」

二人はあたしを向き直して言った。

「携帯とか持つてないんすか?なんでしたら、梓見かけたら電話しますけど…」

「緒山くん、つやらしいなあ…なにそれ?ベタすぎるでしょ?」

「いや違う違う違う、僕は人としてね。困ってる人をさ…」

緒山くんの申し出を止めるように、すかさず沼ちゃん横やりを

入る。二人はやいのやいの騒ぎながら、楽しそうに話していた。こうして楽しんで勉強して…大学に行って、そこでも遊んでは勉強して…そして、ちゃんとした会社に就職して…。このとても楽しいうな二人を見ていると、改めて自分の人生との違いを思いつめてしまう。

「ごめんね、携帯はお店のしかないんだ…ていうか、悪いしいいよ。別に急用じゃないしね。地道に探すしさ」

はしゃいでた二人は…あたしの言葉で落ち着いて、沼ちゃんが向き直って言う。

「じゃあ、梓見たら探してる人がいるってことだけ伝えとくよ。なんなら店に連れて行ってもいいしさ」

(…でも、会っても…なんて話すのかもわからないし、向こうはあたしのことなんてまるで知らないだろうし…どう考えても変な話で…それで、あたし超変人と思われちゃうかな…)

とつさに色々考えて、あたしは答える。

「いいいいいよ、ほんと、気使わないで」

言って、

「気使うのはあたしのし…ご…とですから!」

「じゃね!よかったらまたお店に来てね!」

と、矢継ぎ早に言って、なぜか走って…あたしは逃げるようにして、

市電に乗ったのだった。

熊本市電は、ＪＲ熊本駅よりも少しだけ南を始点として、熊本市役所や熊本城前、辛島町などの熊本市の中心部を抜けて、先は健軍という地域までを通して、とてもローカルな雰囲気がある、いわゆるチンチン（路面）電車だ。ＪＲ熊本駅前の乗り場からは、多くの人が乗り降りする。乗ったらすぐに乗車整理券を取り、それと現金かチケットを運転手に見せて料金箱に入れて、目的地で降りる、というシステムになっている。

発車間際というわけでもないのに、小走りで市電に乗り込む。

（…まだ発車しないな）

運転手が外で煙草を吸っているのが見える。駅前の植え込みの方を見ると、二人が予備校の方へ歩いているのが見えた。

（…今から勉強するのかなあ）

わたしは勉強なんてろくにできなかった。一応…義務教育を終えているとはいえ、おおよそ普通でない人生を送ったあたしは、アルファベットを最後まで言えない、九九が出来ないほどの知能であつた。もちろん暗記科目もすべてダメだ。大学を目指す者の考えや、ライフスタイルなど…想像できるはずもなく、あたしは歩いて予備校の方へと消えていく二人の背中を見続けた。

「あの…落しましたよ」

電車の最後尾は長い座椅子になっている。隣り右奥に座っていた男の人が、整理券をあたしに手渡してくれた。

「あ、すいません…」

眼鏡をかけた優しそうなその男の人は、少し微笑んで会釈した。乗客の入りは半分程度で誰も座っていない席もあった。

（席空いてるのに…何も考えないで、つい隣に座っちゃった…。変に思われちゃうなあ…。でも、ここで席を立てて他へ移るのも失礼だよ…。不自然なくらい近くに座っちゃったけど…もうしかたないや…。）

市電はこのまま…、特に乗客が増えることもなく発車する。ガタゴンゴンという、機械的だけれど、どこか不規則でアナログな音がこだまする中、車掌が次の乗降口をアナウンスする。それを繰り返しながら、夕方で赤く彩られた街並みが車窓に映し出される。電車に乗る時はいつだってそうだ。緩やかに揺られて、外の景色に見入っている。まどろみながら景色を眺めていると、誰かさんの声が車内に響いた。

「…もしもし」

着信があつた携帯電話に出たのであろうその声は、ものすごく気だるく…嫌そうなものだった。本当に嫌いな相手からかかってきたからこそ、今のようない低いテンションの声になったのだろう。

「今はなあ、市電の中だからさ…」

さっそく電話を切ろうとしている。

「わかったわかった。じゃあ新市街で降りるよ」

誰かさん…その男の人は本当に嫌そうに了承し、電話を切ったようだ。…耳につく音は、またアナログな車輪の音とアナウンスだけとなった。

交通センターを過ぎて新市街前になると、下車のサインである音が車内に響く。乗客は自分が降りる停留所が近付くと、近くにある降りますボタンを押して、車掌に降りる意思を伝える。

「…つぎ、停車します…」

車掌の低いトーンが車内に響く。停留所が近づいて市電のスピードが落ちると、少し前の席で男が立つ。おそらくは電話の主だろう。優男だが…スラリとして知的な感じする。グレイのコートとセカンドバックが渋いけど、顔立ちはまだ若く、二十歳前後かなあ、と思った。

「すみません、前…いいですか」

前の男を見ていると、横から声がした。見ると、さっきの眼鏡の優しそうな男の人が、通してくれと言いたげに、申し訳なさそうにしていた。

「す、すみません何度もっ！」

咄嗟に謝って、あたしは膝をすくめて、眼鏡の男の人が通るスペースを作った。彼はまたもや微笑して、

「いえいえ、お気になさらずに」

と言って、あたしの前を膝に当たらない様に詰めて通って、急いで降りていった。

何日経っても、あたしの裏の人の行動が納まることはなかった。

それどころか、日に日に行動範囲が広まっている。カヤやマキに頼んで様子を探ってみたところ、コンビニで買い食いしたり、マンシヨンの周辺や街に行って、倉下梓を探したりしているらしい。

「もう一人のあなた、肉が好きみたいね。あなたベジタリアンだったよね確か？」

カヤの言葉を聞いて我を疑う。あたしはふだん野菜とお米しか食べない…なのに裏のあたしは、コンビニの肉まんやフランクフルトを美味しそうに頬張っているらしい。もちろん自覚も記憶もまったく無い。あるのは驚きと不安だけだ。

『そこらへん歩いている人捕まえては「くらしたあずさ」っての知ってるか？」って聞いてたわよ』

マキは化粧しながら気だるそうに言う。あたしやカヤよりも数段メイクに気合いを入れる彼女は、それに使う時間もかなりのものだ。鏡台の前に座って、もう一人の自分を見つめながら言う。

「こないだなんて、熊本駅まで行くことしてたわよ。タクに乗ろうとして、タク捕まえる前に倒れてんのよ。私がいなかったら…、きっとあんた救急車呼ばれてたわよ」

…どうもそうらしい。次の日に話を聞かされて驚いたが、何も記憶が無い以上、当の本人としては…謝るより他は無かった。

「ま、あんた軽いから別に大丈夫だったけど」

彼女は身長百八十センチ近くあって、とても大きな体をしていた。カヤにしても身長は百七十センチ弱と、モデルのような体型を誇っている。あたしだけが百五十数センチ…と、ちんちくりんな体をしているのだ。三人で歩いていると、どんな見方をされても目立ってしまう。別にイヤなことではないんだけど…気にはなる。

緒山君と沼ちゃんと駅前で会ったあの日からずっと、休みの度に駅で彼女を探している。と言っても、あれから二度だけ…数時間探しただけで、もちろん会えてはいなかった。

最近、人格とはなんだろう？と、よく思い耽る。寝ている間のあたしは、何かの考えをもって倉下梓を探しているのだろう。それは、あたしの人格の一部であることには違いない。多重人格者…少しだけ調べた時…その時に読んだ本によると、顔つきや話し方、癖や脈拍まで変わってしまうという。また、他人格間で記憶が引き継がれたり、他人格と話ができるケースまであるという。

ひょっとして…今思っているあたしは本当のあたしじゃなくて…あたしが眠っている間に、梓を探しているあたしが本当のあたしだった…たりして…。いったいどっちが本当の自分の人格なんだろう？…なぜ二つもの人格ができてしまうんだろう？…そもそも、普通は人格が一つしかない…というのも思い込みだった…たりしない？…ていうか…裏のあたしは梓を見つけて何をする気なんだろう？…：…：わかないことばかりだった。

しかし…、小さい時から寝ばけることはあったけど…こんな夢遊病以上の行動を取ることなんてなかった。…何が原因かもわからない

い。皆目見当がつかない。

でも、深く深く考えると、なぜか懐かしい感じや、心に引っ掛かりがあった。なにかまるで…大切な何かを忘れてしまい、必死で思い出している時のように…なにかが氣になるというか…氣にかかるというか、胸騒ぎというか…。

このまま人格の裏側にいるあたしが大きくなって…あたしの中のあたしが消えたりしてしまったら…どうしよう…。なんかやたらと忘れやすい頭は、ひょっとして消えてしまう前兆じゃないのかな…などと考えて、不安は次第に大きくなる。

いくら体が健康体でも、人格が消えてしまえば…それは存在の消失であり、死にも等しいものだろうと思った。だいたい…人間の死とは、体が死んで、脳も死んで…終わってしまうものだろう。有り得ないことだろうけど…科学技術なんかで、体が消失しても、脳の中身、意識だけでも残ることができれば…それは死にはならない??…体は消失しても、生き続けることが出来ていると…言えるかもしれない。

「命ってなんだろう…存在ってなんだろう。あたしってなんなんだろう??」

あたしは呟くように、か細い声で言った。二人はもう仕事に出ていっており、リビングには誰もいない。

夕日が窓から差し込み、マンションから見える景色と、リビングとを映えさせている。ひとりぼっちのリビングは、沈もうとする陽の光を受けてか、ほんのりと寂しげにその姿を保っていた。久々の連休をもらっているあたしは、リビングを後にして、赤のコートを

羽織った。

…すべての疑問は倉下梓が解決してくれるはず…いつのまにか…何故かそういうことになっていた。そう信じているあたしは、今…もう夜になろうとしている街へと向かった。

夕方の市電に揺られて、ＪＲ熊本駅前まで行く。日が落ちると…駅前と言えど、人はまばらである。交番の周辺、ミスタードーナツの前、ゲームセンターの中、駅構内、予備校の前…二人に教えてもらった、彼女が現れそうなところを一通り見てみる…が、それらしい人物は見当たらなかった。

最後に来た予備校の前から建物の裏手に行つて、腰をおろして一休みしていると、予備校の授業が終わったのか、自転車を押して出てくる男の人や、連れ立って歩いている男女が続々と出てくる。

彼らは会社勤め後の社会人などと違って、どこか楽しげで、夢だか未来だかのある笑顔をしていた。しばらくすると知った顔も出てくる。

「あ…、」

もちろん緒山君と沼ちゃんである。彼らは、一見して…異様に可愛らしい女の子を連れていた。茶髪で少しパーマのかかった髪は耳が隠れるくらいの長さで、背丈はあたしと同じくらいか。日本人離れした…まるでロシアだか、ヨーロッパだかの少女のような整った顔立ちで…。かばんを持った両手を後ろにおいて、少し前屈みでひよこひよこ歩いている彼女は、同じ女の子から見ても…まるで天使のようなルックスをして、愛らしい仕草を持っている。

男性数人に囲まれている彼女は、屈託のない笑顔で緒山君や沼ちやんとも話している。あたしが就職してから一年以上…、ルックスで勝負する女の子を何人も…何人も見てきたけど、彼女は遠く遙かな世界にいるのでは、と思わせるほどの見た目の愛らしさを持っていた。

「あんなルックスだったら、うちでもすぐにトップを取れるわきつと……」

自分で言うのもなんだけど、あたしのルックスは悪くないと思っている…それでも思った。

（あたしにあればどのルックスがあれば…殺人犯の娘でも、もっと違った人生を送れただろうなあ…）

と。

沼ちゃんがあたしに気づく。軽く手を挙げて…彼女を中心とする輪から外れて、こっちにくる。緒山君はこちらに気付かず、彼女とその取り巻きと一緒にたまたま、遠ざかって行った。

「やあ、よく会うね」

彼はあたしと話ができる距離まで来ると、鞆を持ち直しながらそう言った。あたしは無言で笑顔を返す。

「梓を探してるんだろ？…今日も」

「……うん」

彼の問いかけに静かに答える。

「あのすごく可愛い子と一緒に行かなくていいの???行っちゃうよ」

彼女とその取り巻きは、すでに遠く視界の端へと行ってしまっている。彼は横を向いて彼女たちの姿を見ると、首を横に振った。

「いいさ、明日もまた会える。…メイさんとは明日も会えるとは限らないじゃん?」

彼は、段々と遠ざかって行く彼女とその取り巻きを見ながら、そう答えた。

「…うん、そだね」

少々の沈黙の後、ブロロロロロ…と軽トラックが目の前を走っていく。季節は、寒さのピークを過ぎた…一月も終わりに差し掛かっている。沼ちゃんが言う。

「あいつは全然姿を現さないなあ」

言って、少々間をおいて続けた。

「…他にも梓を探してる人がいてさ、緒山君がそいつに言ってたんだけど…彼の話、聞かない?」

第一話 人格の裏側 vol.03 (後書き)

前作「あずさが通る！」とは直接関係していませんが、様々なシーンでオアーバーラップしています。読まなくても楽しめますが、読んでいるともつと楽しめるようになるように苦労しました。未読の方はお暇があつたら是非読んでみて下さい！<http://ncode.syosetu.com/n0971w/>

第一話 人格の裏側 vol.04（前書き）

熊本は実は水商売でも有名で歴史ある都市なんだそうで、国内初のソーブランドも熊本市であったとの話も聞いたことがあります。この業界のことを少し詰めて書きたかったのですが、全体の雰囲気にとぐわないため、メイカヤマキの三人の職業として出るだけに留まりました。機会があれば現場で働く方々のお話など聞いてみたいです。

第一話 人格の裏側 vol.04

沼ちゃんはとても優しく…あたしのような水商売の女にでも、な
んの躊躇いもなく話しかけてくる。外で会っても知らない振りをす
るのが大方。こっちも気を使って、それに合わせるのが暗黙の了解
だけれども、彼は違うみたい。…あたしに殺人犯の血が流れている
と知ったら、こんなに自然に…話なんてできなくなってしまうのか
な…などと考えながらも、笑顔で答える。

「うん、是非！」

あたしがそう言うと、彼は笑って口を開いた。

「あー、簡単に言うただけど…梓には付き合ってるか、付き合っ
てないかわからないけど…とにかくそういう親しい関係の人がいて
さ。そいつは家木ってんだけど、いつも一緒にいるわけだ。つまり、
彼女を探すなら…その家木君を探せばいいってわけだ」

「ふんふん」

彼は、言っただけいいものの、何から説明すればいいのか…といった
感じで話を続けた。

「梓はとにかく…気分屋でよくわからないやつで、どこにいつ現れ
るかわからなくて、梓も家木君もほとんど予備校には来ないし、
最近は家にもいないらしくて、携帯に電話しても繋がらない」

あたしは眉間にしわを寄せて言う。

「…ぜんぜんダメじゃん」

彼はああ、と頷きながら話を続ける。

「うん…でもな、家木君はさ、今度のセンターも良かったみたいだし、京大医を受験するらしいんだわ」

「つまり、二次試験会場に行けば、確実に会えるだろうってこった」

「???聞き慣れない言葉ばかりだ…すぐに聞き返す。」

「センター?きょうだい?二次??」

あたしはよほど間の抜けた顔をしていたのか、彼はすぐに噛み砕いた言葉で答えてくれた。

「つまり、今月の二十五か二十六日に京都大学に行けば、彼女もそこに現れるだろうってこと」

「京都大学…え、それって…」

彼はゆっくり大きく頷いて、まるで子供に言い聞かせるようにしてこちらを見る。そして、ゆっくりと言う。

「はい、京都にあります」

「…やっぱり?」

…なんか話が大きくなってきた。でも、京都に行けば…倉下梓に会うことができる。…そして、会いさえすれば、彼女はあたしの人格の裏側にある、不安や疑問を解決してくれる…はずだ。

よくよく考えればなんの根拠もないけど…少なくとも裏のあたし

が…あたしでないあたしが、必死で探している女性と会うことは、現状になんらかの変化を与えることは違いない…とそう思った。それだけ考えると、急にテンションが上がってくる。

「オツケーわかった！二十五日か二十六日に京都だねッ！」

沼ちゃんは、急に上がったあたしのテンションに少しびっくりして答える。

「あ、ああ…京都大学ね。…京都まで行きさえすりゃ、地元の間人なら誰でも知ってるよ」

「へええ、有名な大学なんだね」

沼ちゃんは呆れたような顔つきで答える。

「ええ、そりゃもう有名に有名ですよ」

夜も九時過ぎ。沼ちゃんにお礼を言って別れて、念のためにとって、先ほども見回った駅前を、もう一度一通り見て回る。が、もちろん彼女らしき姿を見つけることはなかった。

彼女に関しては、ルックスの特徴しか聞いていない。緒山君も沼ちゃんも、一目見ればわかると言ってはいたが…。今まで探していて、見た人の中に彼女がいたかもしれない…などと考えてしまう。そう考えると、名前だけでよくまあ…ここまで漕ぎ着けたものだし…とも、アホなことをしてるなあとも…我が事ながら思った。

「ま、京都で会えばいいんだし」

独り言を言う。別にここで会えなくとも…二十五日は確かお休みだったはず…。前後にもお休みを取れば、京都に行つて、彼女を探す時間は十分に作れるだろう。こうなったら…どこまでも食らいついてやるっ！と、そう思った。

それは…そう思った瞬間だった。いきなり誰かに見られている…と、そう感じた。視線を感じた。商売柄か育ちのせい、他人の視線には人一倍敏感である。この感覚は間違わない…。

ゲームセンターの前のベンチから、その視線の主の方を振り向く。…エレベーターの前の、植え込みの壇の前に屈んで、寒そうに両膝を抱えている女の子がいる。そして、バチリと目が合う。あたしは反射的にすぐに目を逸らす…ルックスもろくに確認できていない…が、あれがあずさだと、あれがくらしたあずさだと直感的にわかる。四六時中、植え込みの壇の前にいるという話もあったハズ…。

（彼女が…そうなのか…）

彼女との距離は五十メートルほど…これで京都まで行く必要もなくなつた…。あたしは、彼女の方へゆつくりと歩き出した。視界の端に見える彼女は、まだあたしを見ているようだった。目の端に視線を感じる。脇に赤いランドセルのようなカバンがあるのが見える。靴も黒の編み上げブーツだ。

（間違いない…）

あたしはゴクリと唾を飲んで、彼女との距離を縮めてゆく。そして、凜として彼女を見据えた。

彼女はまだあたしを見ていた。彼女との距離が縮まる。くらしたあずさ…夢の中のあたしが探している女の子。あたしは、今から彼女と合間見えるが、夢の中のあたし…あたしの裏側にいるあたしは、彼女と会えたのだろうか…。

なぜだか、彼女があたしの人生の畏怖を打ち砕いてくれるということになっている。ただの感にすぎないけど…。実際、悩みくらは相談できるのだろうか…。

彼女との距離はとくに縮まっていて…かなり近かった。なのに、あたしは考えてばかりいた。殺人を犯した父のこと、父に殺された家族のこと、あたしの記憶の欠損のこと、不遇な人生のこと、人格の裏側にいるあたしのこと…話さなければいけないことは多い。見知らぬあたしは、見知らぬ彼女を探して…一体どうしようというのか。その答えも出るのだろうか。

自分の目の前で立ちつくしているあたしを見据えて、倉下梓は屈み込んだまま言った。

「なにか…？」

彼女はあたしを見上げてそう言った。知りもしない人が、いきなり目の前に立ち尽しているのだ。ふつうは戸惑うであろう場面にいるはずの彼女は、どこか冷静な感じだった。まるでこの場面をすべて予測していたかのように…計画通りだったかのように…それほど彼女の第一声は、冷淡で驚きがないものだった。あたしはまだ何を話しているかわからないでいる。

「……」

しばらくの沈黙が続いて、もう何も考えることができずに、沈黙に耐えかねて…言葉を発した。

「く、くらしたあずさ…さんですよ。」

彼女は、訝しげな表情から呆れた…という表情になって答える。

「そうよ。あなたは…えーと、坂本…朋子さん？それとも…」

驚いたのは彼女でなくあたしだった。…なんであたしの名前？？驚きはすぐに声となって出る。

「…なんで、あたしの名前…」

彼女はじつとあたしを見ている。少しの間を置いて、彼女はため息をついて答えた。

「あたしだと知って話しかけてきたのではないの？」

言って、

「用件が無いなら帰るけど」

そう続けて、彼女はスクと立ちあがった。

「え？あ、あの…」

立ち上がった彼女は、険しい表情になっていた。あたしを見据えたままの彼女は、立ったきり…その場を動かない。

「あ、あたしはあなたと会ったことがありますか??」

咄嗟に出たセリフは頓珍漢なものだった。もう一人のあたしは出会っているのだろうか、そう考えてのものだったのだろうか…自分でも質問の意図がよくわからない。なのに彼女は、冷静に答えてくれる。

「あるわ。覚えていないの?」

そう答えた彼女は、あたしに背を向けて…ぎこちなく歩きだそうとした。どうやらしばらく屈みこんでいたせいで、足が痺れているらしい。あたしは彼女を引き留めようと必死で言葉を繋ぐ。

「あたし、なんでもかんでも忘れちゃって…それで、なんか色々悩んじゃって…あ、そうだ、夢遊病、夢遊病なんです。それで夢の中のあたしがあなたを探していて…それで、あなたは何かあたしのことを…」

言いながら思う。

(これじゃ全然…ただの変な人じゃない。何言ってるのよあたし…)

ごちゃごちゃと変な言葉を発すあたしに背を向けて、

「じゃ、またね」

と、小声でほんの少しだけ上機嫌にそう言った彼女は、市電乗り場の方へと…まだぎこちなく歩いていく。あたしはその後ろ姿を半ば呆けて見ていた。

（あーもう、なんでちゃんとなんて喋るか考えてなかったんだろ！）

あたしは両手で頭を抱えて、髪の毛をわしゃわしゃといじって思った。

（必死で彼女を探したのに…なんの解決にもなっていないじゃないもうっ！！）

「メイ？あんなにやってんのよ」

随分と聞き慣れた声に振り返ると、そこにはカヤとマキがいた。ふいに冷静に戻る。

「え？あなたたちこそ何やってんの？こんなところで…」

「お、ちゃんとホントにメイじゃない。まさかまさかひょっとして、今のが…くらしたあずさ？？」

カヤは、梓が立ち去っていった方を見て言う。

「私達、宇土のモールに行ってきたのよ。その帰り」

マキはそう言って、

「はいこれ、おみやげ」

と、右手に持っている袋を上げる。どうやら二人は、あたしと梓の

やり取りを聞いていたらしい。カヤは、

「あんな話し方じゃ…向こうだって戸惑うわよ」

呆れてそう言った。

「でもあんたを知ってたじゃない。あんた本当に覚えてないの？思い出せないの？」

マキも不思議そうな顔で言う。そう、彼女はあたしを知っていた。坂元朋子はあたしの本名…。今、あたしの本名を知っているのは、カヤとマキやうちのボス、義理姉やその家族くらいしかないはず…。同じ小学校や中学校だったのだろうか？それにしても…やっぱりまるで心当たりがない。あたしの腑に落ちない表情を見て、カヤは言った。

「あんた自分の身辺調査したら？？なんか思い出すかもしれないし、夢遊病のことだって…いつペン専門医に相談すべきよ」

マキもうんうん、と頷いている。

自分のことを知る…。あたしは今まで、過去のことを避けて生きてきた。過去を考えると、必ず父と殺人のことや、記憶の欠損のことを考えなければいけないからだ。そして、あたしの人生を改めてまじまじと見て、その不憫さを思い知らなければならぬ。

（でも…いつかはやらなければいけないと思っていたこと…）

そう、今まで逃げてきたが、いつかはどうにかしなければいけないと考えていたことだ。その時期がきた、というだけのこと。

「うん・・・」

随分な間をおいて…あたしがそう素気なく返事すると、いきなり

「バシッ!」

カヤに背中を叩かれる。

「なあゝにやってもいないうちから弱気になってんのよ!」

「あんたの昔に何があるのかなんて知らないわよ。でも…逃げ続け
たって、何も変わらないわよ!」

そう言つて、あたしの冷えきつた手を引く。

「…帰る場所があるだけいいじゃない」

マキも空いた側のあたしの手を取った。

「はい連行しまーす」

そして気付く。あたしの人生は、なにかもが不遇で不憫なもの
ではないと。けして幸せではない…泥沼にハマった人生かもしれな
いけど、そこには何輪かの花が…わずかでも、ちゃんとあるんだと。

そう思つて、あたしは二人の手を引っ張つて、帰途に就いた。あ
たしの現状や思い煩いは何も解決していない。だけど、少しだけ…
少しだけ心が軽くなつた気がした。

それから一応…、何度か倉下梓を探しにJR熊本駅に行った。彼女はあたしのことを知っていた。ひよっとするとあたしの過去のことも知っているかもしれない。それを問うてみたかったし、裏側の人格などの…思い煩いについても、今度こそちゃんと話してみたかった。…が、彼女に会うことはできなかった

梓と会って数日後、育ての親である叔父叔母と会って話を聞こうとしたが、けんもほろろに追いつかれた。あたしが出て行った時に残っていた物は、すべて処分されていたので、アルバムや文集で倉下梓の名を探すことも出来なかった。父や母、姉、兄については、すでにあたしが聞いていることだけで、目新しいことやあたしに隠していることはない、と彼らは言った。伯父伯母はあたしの姿を見て、まるで疫病神でも来たかのように振舞ったが、話については本当のようだった。酷い態度を取られたものの、彼らの心情も理解できる自分がいた。

「殺人を犯したものの娘の行く末など、こんなものだろう」
と叔父は言い捨てた。

「私にだって血はある。どれだけ迷惑があつたと思う…？」
私がいなくなつてから、近所付き合いがまだマシになったとも聞いた。

叔父叔母の家を後にして歩いていると、あたしを見兼ねた義理姉だけが、すこし涙ぐみながらあたしをつかまえて、こっそりと話をしてくれたのだった。しかし、知り得たことと言えば、もはや記憶

から失せていた旧住所だけで、他にはすでに聞いていることばかりだった。それよりも彼女の優しさが心に染みた。

二月の頭過ぎ、まだ風は冷たい。

「…京都に行けば、倉下梓に会えるのかな」

彼女と会った…エスカレーターの前植え込みの壇の前で、ポツリと独り言を言う。現状はほとんど何も変わっていない。友人と住むマンション…たった一か所だけど、帰ることができる確かな居場所が、あたしの心を軽くした。

過去のこと、父親がやったこと、夢遊病のこと……思い煩いのなにもかもにケリを付ければ…もつと心は落ち着くだろうか。泥沼としてある人生が、少しは華やくだろうか。

倉下梓はあたしの名前を知っていた。あたしに会ったことがあると言った。あたしが彼女を知っているはずという素振りを見せた。去り際に、またね…と言った。彼女とのやり取りは鮮明に記憶に残っていた。サツと立ち去るはずが、足が痺れて動けなくなっていた、マヌケな彼女の仕草が脳裏に蘇る。

「すいません…」

近くで声がして、その声の方を向く。そこには知らない男性が立っていた。黒髪の短髪で、メガネで華奢な感じ…。カジュアルな服装で統一した彼の姿は、あたしのケバケバしい格好とはまるで正反対だった。ふいに…いきなり話しかけられたにも関わらず、なにも警戒感が沸かなかったのは、その男性の放つ雰囲気、とても和らいでいて…優しげだったせいに違いない。

「ひょっとして、倉下梓…さんを探しているんですか？」

あたしはここで初めて、戸惑いながら、

「は、はい…。そ、そうですね、それがなにか？…あなたは？」

と、声に出す。彼は、軽く咳払いして言った。

「いきなり話しかけてすみません。僕は濱北覚といいます、実は…僕も彼女を探していました…」

彼は余所余所しく自己紹介して…自分のことを簡潔に話し出す。すでに市電の中で一度出会っていることを思い出せたのは、また後の話…彼がそう言うて思い出したから。

彼はあたしと同じく倉下梓を探しているらしい。病院に看護師として勤めているらしい。知り合いにあたしに似た人がいるらしい…。

あたしたちは一緒に京都に行つて、倉下梓を探すことになった。ゴトリと音がして…あたしの人生の運命の歯車が回りだす。この先は泥沼だろうか。行き止まりだろうか。それとも、花の一輪でも咲いている原っぱだろうか。

第一話 人格の裏側 vol.04（後書き）

その昔、ストーリー四コマなるものを魔夜峰央先生が行っていました（あずまんがもそうですね）が、ああいう手法はとても興味深かったです。「帰る場所」があると自覚したことで、メイは少し心の安息を得られたわけで、これにて第一話は終わりとなります。でも、このまま話は続いていきます。「道標のあずさ」はこんな感じでストーリー四コマ的な話の作り方に挑戦します。

第二話 現実の断片 vol.01 (前書き)

早くも第二話です。今話もどうか心穏やかにお付き合いくださいまし。

第二話 現実の断片 vol.01

第二話 現実の断片

別に何でもよかった。バレーボールでも、バイオリン演奏でも、ピアノ演奏でも、書道でも、絵描きでも、お茶でも、柔道でも、俳句詠みでも、釣りでも、山登りでも、作詞でも、麻雀でも、パチンコでも、映画鑑賞でも、社交ダンスでも…なんでもよかった。

写真を選んだのは、それはただ単に…家に余ったカメラがあったからだ。別に写真に興味があったわけでもなく、誰かにやらされたわけでもない。好きな事でもないし…ほかに特にやることが無かっただけだ。特に面白さを感じることはない。夢中になったわけでもない。ただ…やるからには誰にも負けたくはないし、人より抜kindでた腕前を身につけたい…という野望は確かにあった。

積み重ねるだけの価値と可能性は、写真の世界には十二分に用意されていた。プロアマ大小を問わず、常々開催されるコンテストや、写真を撮ることで食うに至る職業家、金銭を超えて芸術品のレベルにまで達した代物…などが、世に無数にあることは、写真の世界の奥深さと魅力が、毅然として存在するという一つの証拠であろう。

図らずとも私の青春…いや、青春だけでなく己の人生の大部分…二十年にも満たないけれど…は、写真に注ぎこまれていた。

「はい、撮りますヨ…笑って」

言って、私はシャッターを切った。ついこないだをもって二十歳になった私は、今も写真を撮っている。しかも、職業として。

近くのブルーカメラのスタジオのアルバイトは副職。本職としては、新聞社や雑誌社に写真を提供するフリーのカメラマン…これらが私の生活の中心だった。そして、生活の中心ではない趣味の部分…それは、たまにぶらりと外を歩いてはシャッターを切って、その写真でアルバムを作ったり、友だちに被写体になってもらって、プレゼントしたり…というもの。つまり、現在の生活のほぼすべての時間が、写真に注ぎこまれていた。

「春日くん、時間時間…、過ぎてるじゃないか。もう上がってくれていいよー」

おそらくお見合いの写真にでも使うのだろう…正装でおめかししたお客さんの写真を、すぐに引き渡しできるよう整理していた私に、店長の下澤さんが笑って言った。

「はいーっ」

明日渡しの予定がある写真をすべて用意すると、私は店長に挨拶してお店を後にする。

私の写真を撮る生活は…ただの惰性に過ぎない。とはいえ、私はこの行為を心底楽しんでいた。単純にシャッターを向けた時の被写体の姿や表情が好きだし、いつでもあっても、出来上がってくる写真を見る直前はわくわくする。こうした…アルバイトからの帰宅途中という…なんら特別性がない状況でも、面白そうな情景は確かに存在する。きっと私が気付いていないシャッターチャンスなぞ…この世にごまんとある。そう考えるだけで、私は私が知らない素晴らし

いそれを撮りたい！と、強く思うのだった。

面白いもの、綺麗なもの、素敵なもの、珍しいもの、感動の場面、悲劇の惨状、事件の現場、男前の立ち姿、美女の艶姿、子供の笑顔、小動物の寝顔、美しい夜景、目を疑うような絶景、世にも珍しい自然の神秘…感動の写真は、生物に与えられた絶大なる感覚のうちのひとつである…視覚…の支配下にある。

私たちは写真家が目にした視界を、写真を通して自分も同じように目にする事ができる。そこには空間的な遮りも、時間的な妨げも無い。一枚の写真さえあれば、私たちは生まれる前の…今、住んでいる町を見ることが出来る。また、一枚の写真さえあれば、火星の表面を目にすることもできる。一枚の写真さえあれば、その人が絶対に行けないであろうところを、簡単に目にする事ができるのだ。この当たり前のことに、私は子供の時から感動し続けている。

科学の進歩により、写真は更なる進化を遂げて、人々のもとへ届いた。安価で手軽なインスタントカメラの台頭、そして現在ではデジタルで画像を処理するデジタルカメラというものがあり、いずれ携帯電話の機能として、電話にまで付属させることができるという…そんな開発企画があり、程なくして実装されると聞いている。

そう、今や人は誰もが撮りたい時に、カメラマンになることができるのだ。いつまでも若さを保ちたいと思った人がいれば、その瞬間の姿をずっと残すことができるし、好きな人の姿をずっと見たいと願う人がいれば、見たい時にその人の写真を取り出せばいい。十年以上写真を撮り続けてきた私は、あらゆる方向への可能性を、写真一枚の中に見出すことができた。

疑問のきつかけは、妹の何気ない発言だった。家に帰って、夕飯の用意をしている母を尻目に、畳に寝転んでテレビゲームをやっていると、妹のさやかが帰宅した。

「ただいまー！」

彼女は家中に響き渡るような大声でそう言うと、カバンをどさりと乱暴に玄関口に置く。そして、私を見るなりそばに来て、ゴロゴロしている私の、縛ってある髪の毛を後ろから掴んで、笑って言った。

「まあたお姉は寝転んでお菓子食べてゲームして…ふとーっるよっ」

と、一緒に寝転びながら、お菓子を横取りする。

「別にいいじゃんか。家にいる時しかできないんだし」

と、冷たく返答すると、彼女は何気なく会話を続ける。

「食っちゃ寝食っちゃ寝で、外に出たら写真しか撮らないし…。そん나다から彼氏も出来ないんだよ」

私たちはいつもこんなしょうもない会話を繰り返している。

「彼氏なんてどうでもいいのー、写真だってただの惰性だしどうでもいいのー」

写真に対して色々と考えることはある。多々ある。だが、そこに使命感や一生やっていこうという決心などは感じていなかった。なぜ写真を撮るのか？と問われれば、それには、うっっん、成り行きだ

よ…と答える。正直なところで、本気でそう感じているからだ。

「どうでもいいんなら、趣味だけでももつとかっこいいのにしなよー、写真なんてさ、写ってんのがどんな綺麗なものでも、目をつぶっちゃうだけで消えちゃうんだよー。なんか半端じゃない??」

彼女は、のり巻き煎餅やあられを横取りして、ぼりぼり食べながら言う。その何気ない言葉は、妹や私本人が予想する以上に、私の心に響いた。

（目を瞑ってしまっただけで消えてなくなる…）

それは確かにその通りだった。写真は目が見えない人にとっては、何の意味も持たない。何ももたらさない。

（…当たり前のことなのに…なんで今まで気付かなかったんだろ？）

私は自分自身に問いかけた。テレビゲームしながら浅く、自分に何度も何度も問いかけた。

写真が持つ素晴らしさは、視覚を持つ者にしか伝わらない。それは歌手の歌が聴覚を持つ者にしか伝わらない、素晴らしい料理が味覚を持つ者にしか伝わらない…のと同じこと。健全な者でさえ、目を瞑るという…人間が行う呼吸の次に容易い動作によって、遮られてしまう。

（なんて脆い…拙いものだったんだろう…）

私の中で急激に写真の放つ魅力が薄れていった。妹は、真剣な表情でゲームしてる…ように見えるであろう、私のお菓子を残らず食

べ上げると、考え込む私を尻目に言う。

「なに真剣な顔してるのよ？ 難しく考えちゃダメダメ〜っ」

あはは、と部屋に響く妹の声は、今度こそ私を苛立たせた。

「なんだ？ ハル、今日は不機嫌そうだな」

顔を合わせるなり、写真の取引先であり、私の従姉妹の洋香姉さん……でもある熊本日日新聞社の鈴木班長はそう言った。三十歳そこそこで班長の座まで上り詰めた彼女は、社内きつてのやり手のキャリアウーマンで、私は彼女のおかげで、この熊日新聞社へ多くの写真を売り込むことに成功していた。

「別に……不機嫌ってわけじゃないんだけど……」

「昨夜からなんか考え込んでしまっちゃってるんですねー、私……なんで写真撮ってるんだろって……」

スーツ姿がいやに似合う。机に向かう時だけ掛けるメガネもすごく高級そうで、軽くウェーブがかかった髪と合わせて、いかにもキヤリアウーマンといった感じた。洋香姉は、肘掛のあるイスで足を組んで、湯のみの底をスプーンでくるくるとかき混ぜながら、表情を変えずに言った。

「情性だっって言っていたじゃないか。それに今は写真が職業だろう??？」

彼女は左手に持つ湯のみを、んー？？と持ち上げて、底を見ながら続ける。

「何をいまさらそんなことに悩む？お前はこーんな時から写真を撮っていたではないか」

彼女は右手の親指と人差し指で四、五センチの隙間を作って言った。

「そんな小さかないです。…なんか思い耽っちゃうんですよ。秋ですしねー」

それを聞くと彼女は湯のみを机に置いて、

「耽ってるうちに年が変わるぞ。物思いの秋という時期ではあるまい」

彼女はプリントを数枚取り出して続ける。

「来週の地方欄だ。今度は通潤橋か田原坂辺りを撮ってきてほしい」

「ん。文字の方は大方出来ている」

言って、私にプリントを手渡した。

ここ熊本県熊本市は、九州の中部西に位置する熊本県の県庁所在地である。中心街はそれなりの繁華街になっているが、市内でも少し離れた所や市外になると、ご想像通りのド田舎という具合だ。

私が熊日新聞社から撮影の依頼を受ける時、そのほとんどが熊本県下の田舎の名所を撮影することになる。熊本県の名所と言えば、

阿蘇山や熊本城、天草四郎時貞で有名な天草であろうが、これら以外にもたくさんの名所がある。と言っても、当然ながら全国的に知名度がある話ではなく、少し若い人間になると…地元の人でも知らないというレベルのものだ。しかし、それなりの見所はあるため、最低でも県民には知ってもらいたいという目的もあって、毎週熊日新聞の地方欄には、県内の名所が写真付きで紹介されている。

この仕事のおかげもあって、最近では私が撮る県下の名所の写真は、熊本市報や観光ガイド、駅や公的機関のチラシなどにも使われていた。

「うん、わかった。まかしといてー…下さい」

社内では敬語を使うように両親からきつく言われている…。私は少し落ち気味で返事をした。そして、プリントを受け取って部屋を出ようとした。

「…まあ、若いうちは何かと悩むもんだ」

洋香姉さんはそう言って続けた。

『それと、また「不思議な少女」の方でも依頼するつもりだから、暇な日にちがあれば教えてくれ。』

「不思議な少女」…。彼女は大的オカルトマニアで、同じ趣味の人間を集めては「深海」という同好会を主宰していた。「不思議な少女」とはその同好会「深海」が得た情報をまとめた情報誌のことで、季報として年に四回発刊している。

インターネットの発達と共に、同好の士や情報は日の目を浴びや

すくなり、彼女の同好会の雑誌「不思議な少女」も、その世界では有名なものとなっているらしい。

ここ数年に渡って、この「不思議な少女」のためにも写真を撮っていた私は、てんで靈感なんか縁が無い身であるにも関わらず、いまや写真家として、立派に名前が誌面に載る始末であつた。私と同じ立場として、校正をやらされている新城さんが、枕代わりのデスクから顔を上げて言った。

「ええ??…洋香?…あれまたやんの?」

洋香姉さんは即答する。

「またもなにも、季刊だぞアレは」

洋香姉さんの目先にいる新城さんは、洋香姉さんと違って…童顔なこともあり、スーツが似合っていない。しかもネクタイも歪んでいるし、上着もくたびれてて皺だらけだ。アダルティな雰囲気をつぱん発している洋香姉さん…鈴木班長と比べて、あまりにも子供っぽかった。同じ年だと聞いているんだけど…。新城さんは、眉間一杯にしわを寄せて反論する。

「季刊って…ついこないだ出したばかりじゃん!」

洋香姉は一つも表情を変えずに、

「ああ、あれは号外だよ。文量からして少なかつただらう?」

と、答える。新城さんは大きくため息をついて、一際トーンを上げる。

「ひー、もう勘弁してよーっ！なんで仕事外でも仕事と同じことしなきゃなんないのよっ。これ以上徹夜が続いたら、女じゃなくなっちゃうわよ！！」

そのやり取りを…何が起こしたんだ？？という様子で、もう一人…男性が遠くからこちらの様子をうかがう。その目線に気づいて、新城さんが言った。

「逃げて、守ちゃーん！守ちゃんだけでも逃げてっ！」

遠くの男はうるたえてリアクションする。

「え？え？…いったい何事？？」

洋香姉は仕事のファイルをペラペラとめくりながら、呟くように言った。

「逃げられるわけがないだろう。よりもよって私から…お前たちがなど」

私は、

（…今の「お前たち」には、私も含まれるのかな？）

などと考えながら、トボトボと新聞社を後にした。

バイクに乗って風を切り、適当な方向へと行く。そして目につい

た場所で、目についた物を撮る。ある程度の時間が取れたらいつだって…私はそうしていた。今日も気分こそ乗らないが、いつもの情性…で同じことをする。調子がいい時は直感でわかる。こっちへ行けば、私の心をくすぐる何かが撮れると。面白いもの、美しいものが見れるという匂いがする。だが、今日はそれを感じない。

「目を瞑るだけで消えてしまう…視界のみに存在する情景…」

写真は見えるものだけを、その瞬間で残すだけだ。それ以外は、匂いも、味も、音も、時の経過も残せない。そして、目を瞑るだけで消えてしまう…。それは極端に言えば、盲目の人には何も通用しないということ…。重度の色盲の人にとっては、どんなに色鮮やかな情景でも、白黒写真に見えてしまう。…写真だけに限ったものではない。目に入る世界がすべてそうだし、全盲であれば色も形も、その世界そのものが無い…ということだ。

スピードを徐々に加速させて、私は自らの視界を確かめた。無数の規則的な白線と街頭が瞬時に通り過ぎ、まるで違う何かのように…なびいては視界を通りすぎてゆく。ランダムに現れる車は、それぞれの色を持って、点で輝いている。すれ違う車と抜く車は、速度が違えば方向も違うので、まったくのアトラダムで目に映ることになる。赤だった空も徐々に黒くなり、さらに視界を変貌させていく。

…先天的な全盲であつたら、どんなに素晴らしい写真も意味をなさない。それどころか、何一つとして目に入るものはない…。そういった人間に…写真は何も伝えることはできない。これが…写真の限界。

私は生れて初めて…写真を撮るのをやめようかな、と思った。い

ま出している速度はかなりのものだ。法定速度はすでに超えている。もう少し加速したら…スピードの向こう側という、特殊な視界を目にする事ができるはずだ。

漫画やテレビで伝え聞く、その情景を私は一度も目にしたことが無かった。…でも、写真では見たことがある。体感した者でないと、見ることが許されない視覚さえも…簡単に共有できてしまう。そう感じたとき、写真は無敵で万能だと思ったものだ。

それが…こうも脆いものだとなんて思ってしまったら…、それは私の中では、止めてしまうに十分に値する事に…成り得る。

まるで写真に裏切られたような気分…。写真だけでなく、自分にも無力さを感じてしまう。私がいかに被りすぎていたのかも…。

第二話 現実の断片 vol.01（後書き）

写真を撮るなんてとても簡単なことのように思いますが…人によってはこつも考えてしまうものなんですねえ。世界の深層への入り口なんて、世の中のあらゆるところに用意されてるといふことです。

第二話 現実の断片 vol.02 (前書き)

「田原坂」という所も（まあ、何もないのですが）隠れた名所だったりします。昔は怖場みたいな扱いだったのですが、最近では映画「ラストサムライ」でモデル地として使われたとの話もあり、少しスポットライトを浴びているようです。

第二話 現実の断片 vol.02

「…今日はこのまま田原坂へ行くことにする」

そう吐き捨てて、さらにスピードを出す。…無力だからと言って、本当にやめてしまうわけにはいかない。今や写真は私の職である。さらに趣味としての写真は、私の人生でもあった。職を捨てて、今までの人生を否定するような真似が出来るはずもない。だからこそ…情性なのだろう。

気分こそ乗らなかったが…夜の田原坂で、一際心へ光彩を放ちかける景色を、幾分にもフィルムに収めて、私は帰途へ就いた。乗物に乗るとどうも考え込む…。

五体満足な人にとっての写真の可能性…というものは無限に近いものがある。それは私が感じた通り、紛れもない真実だ。だが、視覚が無い者にとっての写真は…何の可能性もない、ただの薄っぺらい紙切れ…。いや…たとえ視覚があつたとしても、それを理解できないのなら意味はない。極端な話、目が見えるであろう犬や猫のような動物に対しても意味を成していない。

「…理解か」

物凄いスピードの中、私は口を開いた。…そう、理解だ。視覚があつて、写真を認識したとしても、それを理解しないのなら、なんら意味を為さない。犬猫では写真の存在は確認できても、その意味は理解できない。まさに猫に小判というものだ。写真に限った話ではない。

「目に見えて、自分の脳みそで認識して、理解して、…そうして初めて、その対象の意味が成り立つんだわ…」

家に着いた私は、ヘルメットを脱いで玄関の扉を開ける。時刻はもう午前二時過ぎだ。

「遅くなりすぎたなあ…明日バイトなのに…」

父も母も寝ているだろう。私は忍び足で二階の自室まで歩く。ここまで遅くなった上に、物音を立てると父が五月蠅い。ソロソロと居間の前を通ると、妹が寝転んでテレビゲームして…いや、ゲームのコントローラーを握ったまま、寝入っていた。

少々思い煩ってはいても、自分の気持ちと仕事との区別は出来る。社会人として大切なのは、自分の心情の不穏やプライベートなことを、職場に持ち込まないこと。私は強くそう思っ出て勤した。

「っはよーございまーっす！」

挨拶は社会人の基本らしい。ブルーカメラに着くと、元気な声で挨拶する。この挨拶がうまくいけば、接客の仕事のうちの八割は上手いく。円滑なコミュニケーション技術は、接客業の基本であり、中核を為す事項である。私は、挨拶と笑顔を武器に世渡りしているようなものだ。

「おはよう春日さん。今日も元気だねえ」

下澤さんは笑ってそう言った。彼は人と争わない穏やかな性格で、

挨拶も笑顔も私のように元氣溢れるという感じではないが、丁寧で静かな物腰で行う。それは私とは別の好印象さを与えるものだ。

彼が自分で言うには、商売下手ではあるが、こうしてお店を構えてやっていけているのは、それはやはり写真への愛着があるからだそう。私は下澤さんの写真観を聞きたいと思った。客足が途絶えたお昼前に、ふと尋ねてみる。

「下澤さん？　なんか写真について語ってくださいよ」

彼は私の突然の質問に、目をぱちくりさせた。そりゃそうだ…。

「いきなりなんだい？？春日さん」

もう少し説明しよう。

「いや、店長が語る写真の魅力ってなんです？？聞いてみたいじゃないですか」。写真の世界に入って、もう何十年にもなるんですよ？」

私は満面の笑み、最上の笑顔を作って説明した。写真に対する思い煩いを出すまいと、少々変なテンションになってしまったかもしれない。彼は、

「春日さん…まるで小悪魔みたいな作り笑顔だねえ。…写真の魅力ねえ」

む…作り笑顔はともかく、小悪魔とは失礼な。本当の笑顔だってこんなもんだっての！私の笑顔が理解できないのかこの人わあー！。彼は、私のそんな気持ちを余所に話を切り出した。

「そう言えば、写真始めてもう三十年以上にもなる。…最初こそ、何気ない道楽のつもりだったが、いつの間にか脱サラして職業にまでしてしまった。私が若い頃のカメラはなあ…」

しまった…話を振っておいてなんだが、この話は長くなりそうな気がする…。

「…とても今みたいに、お手軽って感じじゃなかったよ。…で、写真の魅力だけどなあ…」

…なんだ、短いじゃないか。ったく思わせぶりな口調して…。彼の話は続く。

「写真の魅力…というものは、被写体が何か…で変わってね」

あ、面白そうな話になってきた。

私はお店のカウンターに用意されている椅子の背もたれを抱くように、普通の座り方とは反対に座り込んで、体を前に乗り出すようにして、椅子の後部に体重を預ける。椅子はグイと傾き、ギツと泣いた。

「被写体が人であるか、物であるか、人以外の生き物であるか…その他も様々だけれど、それぞれに違った魅力があるんだ。例えば人だと…知ってる人か、知らない人か、一人か複数か…それによっても変わる」

彼はゆっくりと話を続けた。

「たとえば妻を写すでしょう。彼女は私と結婚して三十数年だ。今、彼女を写すと、きっと…何をいまさらと言って…少し照れながら笑ってくれるだろう。その時の笑顔は、三十数年連れ添った旦那にか向けられない笑顔だ。きっと安心して、落ち着いた表情が撮れるだろう。しかし、これが同じ日、同じ時の妻だとしても、…たとえば余所のスタジオに行つて、照明などのスタッフも介して、赤の他人が撮影したら…きっと慣れないための緊張や、焦りの混じった笑顔になるだろう。」

言つて、続ける。

「…写真は撮られている被写体のみが主役ではないんだ。間接的にだけけど、撮っている者も対象の心に入り込んで、写真の中に写っているんだよ。その他にも、なぜそれを撮ったのか、なぜその角度で撮ったのか、何を写したかったのかなど…あらゆる情報が写真の中にはある。ただ単に、目に映る被写体の様を見るだけでなくて…そついった撮影者の心まで見えれば、それが写真を見る側の魅力になるだろうなあ…」

…思わず聞き入ってしまう。それほど彼の写真観には立派なものであった。

「そして、撮る側の魅力は…設定することだろうね」

「設定？」

相槌を混ぜながらも、…?…?と思つて聞き返す。

「そつ、設定。コンセプトの設定だ。撮影する前に、自分は被写体の何を撮りたいのか、撮ったとしてそれを十二分に他者に伝えられ

るのか、どういった撮り方をすればそれを撮れるのかとか、どうすれば伝わるかとか…」

そんなこと考えたこともなかった…。彼はマイペースながらも話を紡ぐ。

「…それらを明確にして、突き詰めては考えて、少しずつ煮込んでいく。…そして用意しては準備して、失敗しては修正して、繰り返しして…その最後にカシヤリと…」

彼はカメラを構える仕草をした。

「…シャッターを切るんだ」

言って、

「そのシャッターを切るまでの行程が…私が思う写真の魅力だね。それで自分の思い通り、または自分の予想以上に写真が出来上がったら…それはただのご褒美なんだよ」

「若い人はシャッターを切ってから…写真が出来上がってからを楽しむとうとしているようだが、私は逆だね」

そう言って、彼は一息ついた。

被写体の心に移りこむ撮影者、コンセプトの設定、写真はご褒美…どれもが、私が持ち得ていない写真観だった。彼は最後に、

「深く考えることはないんだ。若い時は思うがままに撮ればいいよ。それが楽しければそれでいいんだ。ただ、写真の世界には…きっと

私や春日さんが考えている以上に、深さというか…醍醐味があると思う。それを自らの価値観で狭めることはない。さっきのも、私の一つの価値観に過ぎないんだ。自分の価値観を持ってだね、本当に…思うがままに撮ればいいんじゃないかな？」

そう言って、話を締めくくった。

時刻はお昼過ぎ…私はお腹をグーグー鳴らしながら、下澤さんの言ったことを必死で理解しようとした。難しい話だとは思ったけど、私が悩んでいる…視覚と認識と理解のこと…それを解決するヒントがあるような気がしてならなかった。

夕方六時四十分、アルバイトからの帰り道…。バイクを飛ばして適当な場所へ、ぶらりと寄り道して帰る。考え込んでいると、どんどんとスピードを出してしまい…自重する。

…下澤さんの写真観は素晴らしいものだった。私にはあれほどの気概はなく、ただ直感と、後に出来る上がる写真を楽しむために撮っていたんだと思う。下澤さんなら…きつと

「それでいい、それでいいんだよ」

と、言ってくれるだろう。しかし、本当にこれでよかったのとしても、自分の持つ疑問くらいは払拭しておきたい。それは、私の心の内から生まれ出る率直な気持ちであった。

写真の持つ可能性は…視覚から認識して、その認識の理解が無ければ、まったく無力なものとして否定されてしまうのかな…。これが私の抱く疑問であった。いくら写真の持つ世界が深くて素晴らしいとしても、見えないのなら…その世界の入口に立つことすらできな

い。

…下澤さんは撮影者の立場での写真の魅力を語ってくれた。きっと、被写体の立場での魅力もあるに違いない。撮られる面白さ、それは…まず被写体になることがない私にはわかりようもなかった。

「写真を撮られる魅力…というのがあんなら、視覚が無い人も…写真を楽しめるかもしれない」

そう呟きながら、呉服町のブルーカメラから、JR熊本駅前を通って南に抜ける。私の自宅は、白山の西の方にある。距離にして十キロ程度か、単車で二十分程度…秋の日は暮れて、空が赤から黒に変わろうとしていた。

数日後、年も暮れようとしている日…。撮り終えた田原坂や、通潤橋の写真を洋香姉のもとへ持っていく。

「うん、」苦勞」

昼食中だった彼女は、写真を一通り確認すると、特に気持ちを込めることもなく答えた。そばで私と洋香姉とのやり取りを見ていた新城さんが言う。

「ちょっと洋香、少しは労いなさいよ」

洋香姉は眉をしかめながらも、

「いや、十分に労ったつもりだったが」

と、またも素気ない口調で返答した。こないだ新城さんに守ちゃんと呼ばれていた人が、

「いつもこんな感じなんすよね…。褒めて伸びる部下もいるんすよ？世の中には」

と、コンビニのおにぎりのビニルを剥ぎながら言った。私には理由はわからないが、心なしか彼は元気が無いように見える。覇気というものが感じられない…。

「洋香は少し冷たい口調の時があるのよ。それに部下が堪えるときがあるのよねー」

と、守さんの言葉に同調するかのように、自前のお弁当をつつきながら言った。

「こんなにアヴァンギャルドで可愛い娘が、ウチのしょうもないお約束記事のために頑張ってくれてるってのにっ」

言って、私の頭をグワシグワシと撫でる。

「あ、あのー新城さん…？い、痛い…です」

言って、私は苦笑いした。そんなやり取りを余所に、店や物の汁物をずずいと飲み干して、カッソと器を置いた洋香姉は、ポンと手のひらを叩いて、思い出したように言った。

『そつだそつだ、すまんがまた「不思議な少女」の方で、写真の依頼がある。今回はある女性の写真が必要なんだが…。少し人手と時

間が足りてなくなてな。写真の他に、簡単でいいから、インタビューの方も取ってきて欲しい。』

そう言えば、前もそんなこと言っていたなあ…ていうか、インタビューー？？思わず聞き返す。

「え？インタビューって…。私、そんなのしたことないよ」

新城さんが口をはさむ。

「大丈夫大丈夫、質問は事前に作っておくし。インタビューなんてテープ回して原稿通りに質問して、適当に相槌打っていればいいわよ」

洋香姉も頷いて、

「その通りだ。何も難しく考えることはない。時間にしても三十分程度で終わるくらいのものだしな」

言って、続ける。

「九ヶ星銀行の強盗人質殺人事件は知ってるだろう？あの事件の人質の中に、中学生くらいの女の子がいたそうだ」

九ヶ星銀行強盗人質立てこもり事件…五、六年ほど前に、世間を震撼させた銀行強盗事件だ。たしか…精神的におかしくなった犯人は、二日間くらいに渡って、客を人質に取り、銀行内に立てこもって…最後は警察に射殺された…という事件で、事件中の警察の対応や射殺という結果、犯人の素性や生い立ちを巡って、マスコミや専門家を巻きこんでの…とにかく、多方面から大いに議論された。

色々な意味で、色々な方面に大きな衝撃を与えた事件でもあった。

第二話 現実の断片 vol.02 (後書き)

「九ヶ星銀行の強盗人質殺人事件」は前作「あずさが通る！」でメインとして書いたお話です。この作品には所々前作に絡んだ箇所があるので、未読の方は是非どうぞ！もちろん、読んでいなくともわかるように書いてありますので、ご安心下さい。

第二話 現実の断片 vol.03 (前書き)

近年では本当に写真は身近なものになったと思います。散歩の時にちよつと景色を撮ったりするだけでも楽しいもんです。いつも見ているはずなのに、いつもと違う思いを抱けます。

第二話 現実の断片 vol.03

「あの当時、中学生くらいだったはず…今は二十歳くらいね」

新城さんが腕組みして言う。

「ちょうどお前と同じくらいだ。ハル」

洋香姉が付け足す。そして続けた。

「目撃者の証言によると、その子が一番動じずに犯人と話していたそうで、犯人が射殺された時もすぐそばにいたらしい。その後、警察の事情聴取は受けているのだが…、犯人が射殺された場面以外では、マスコミの前に一切姿を現わしていない。そのため、こちらの世界では、話に尾ひれがついて…實在が疑われたり、非常識な存在ではないのか、などの噂が立っている」

「もちろん實在していて…名前もわかっているのだが…」

「なんすか??…まさかもう死んでいるとか??」

…堪らず守さんが口を挟んだ。洋香姉は目を瞑って、首を横に振った。

「…いや、今もちゃんと生きているさ。ただ情報が手元に来ていないので、ここまでしか話ができんということだ」

私も含めて、その話を聞いていた三人は、

「なんだ…」

と、ため息をついて安心する。

「あの犯人についても謎が多い。頭がおかしかったのではなく、借金返済が目的だったとか、テロ目的だったとか…遺書があったが、警察が証拠隠滅したとか…。親を殺しているだとか…色んな噂が後を絶たない」

洋香姉がそう付け足すと、新城さんと守さんが反応する。

「そうっすね。たしか、お父さんを殺してるのに…子供だったせいで、すぐに釈放されたとか」

「警察に射撃されたってのも異常だったしね。同時に二人から撃たれたんでしょ？」

「人質抱きかかえていたのに撃つたらしいですからね。逸れて人質に当たったら…とか考えなかったんすかねえ」

お茶を飲み干して、洋香姉が二人の会話に入る。

「その人質が今回の取材対象だ」

言って、

「とにかく、その子を探して取材する。それが今度のハルの仕事だ。名前や素性など、新しい情報が入り次第知らせる」

と付け足す。

…取材かあ。考えてみれば、普通の女の子に決められた質問をして、写真を撮るだけだ。何も心配する事はないのかもしれない。私は、

「はい、取材なんて楽勝、まかせといてよ！」

と、元気よく返事をしてみせた。親指をぐつと立てて、部屋を出ようとすると私を、新城さんが呼び止める。

「ハルちゃん、これもこれも」

彼女は一枚のプリントを私に手渡す。そこには「第五十三回 読切新聞社 芸術写真コンテスト」と書かれている。

「提携新聞社のものだけだね。最近参加者が少ないらしいのよー。ハルちゃんこういうの得意でしょ？よかったら、一枚応募してあげてよ」

「今年から賞金総額も上がっている。プロも応募可能だし、うちの看板を首から下げて一枚いいのを送ってやってくれ」

湯のみの底をくるとスプーンでかき混ぜながら、洋香姉も言う。

「うん、わかりましたー」

と、ビラにある細かい文字に目を通しながら、さつきとは正反對に素っ気なく返事をした私は、新聞社を後にして、ブルーカメラへと向かったのだった。

バイトが始まる時間まではしばらくあった。新聞社からブルーカメラへ行く途中の道には白川がある。阿蘇山から熊本市の中心部、有明海まで流れ、名水百選にも選ばれている、市内でも最も大きい川の一つだ。ここに架かる橋も立派なもので、いつだろうとバイクで通ると風が強く切れ、とても清々しい。

橋に差し掛かって信号で止まると、橋の上から、川の流れや河川敷をジョギングしている人達の姿が目に入る。釣りをしている人や、子供たちが野球をしている姿も遠目に見えた。

（あ…、いい感じ…）

そう思うと、私はいつだって必ずシャッターを切る。バイクを道脇に止めて、橋の端までとっと歩いて、カメラを構える。カシャリ…と、グラウンドを撮ったその時が、その子との出会いの瞬間だった。

「すみませんっ！今、何時かわかりますか？？」

初めては、彼女からの問いかけだった。その子は、橋に差し掛かるところの歩道で信号待ちをしていたらしく、時間をたずねるために歩道から離れて、私のところへやって来たらしい。

私が振り向くと、まずは元気いっぱいに話しかけてきた彼女の表情が目に入った。とびっきりの笑顔で、手を後ろに組み、頭を少し横に傾けて、私の返答を待っている。次に目に入ったのは彼女の服装だった。

態度は元気いっぱい。…服装は異質。それが第一印象である。彼女は、下から黒の頑強な編み上げブーツ、迷彩模様のぶかぶかしたパンツに、なんかのバンドのものであるのか…派手な模様や、奇抜なフォントのアルファベットのロゴの入った赤のＴシャツ、ふさふさと黒い毛皮地のジャンパー、胸にはハートのペンダント、腕にはジャラジャラとブレスレット、頭にはツヤが無い黒のカチューシャを付けていた。

そして、小学生が持つような物でこそないが、赤いランドセル型のカバンを背負っている。首にはヘッドフォンが掛けられていて、シャカシャカと音漏れしていた。

目はぱちくりと大きくて、口や鼻は小さく可愛らしい感じ、髪は黒髪、ストレート、セミショートのカチューシャで上がっているため、狭いおでこがキラリと光っていた。手には、これまた黒の雨傘を持っている。彼女の服装を確認した私は、いきなりの声掛けに、少々たじろぎながら、懐中時計で時間を確認して返答した。

「…今は一時前だけど…。十二時五十分ですね…」

年の頃は私と同じくらいか…、少し年下に見えなくもない。

「ありがとうございます…」

彼女は語尾に少し音程をつけるようにしてそう言うと、ふっと私の目から、私が手にしているカメラへと視線を移した。

「すごい綺麗なカメラ…。あなたはきつとカメラマンさんね！」

ビシッと人差し指を立てて、そういう彼女の表情は…真剣そのもの

だった。…カメラを手にしているからカメラマン??彼女の目は純粹そのものである。単純な人だなあと思っても、当たっている以上は馬鹿にもできない。

「う、うん。そうだけど…」

私が肯定の返事をするや否や、彼女は手を叩いて、すごいすごいと喜んでいる。そして、

「写真っていいですねー。私、撮るのはダメなんだけど、見るのは大好きなの」

と言つて、笑顔の上に笑顔を重ねた。軽く相槌を打つ私を見て、彼女はさらに続ける。

「だってさ、考えても見てよ。写真って、誰かのある時の視界なのよ。それをまったくの赤の他人が共有できる」

…視界。…視界の共有。言葉使いがとても上手だと思った。そう、写真は視界の共有だ。撮影者の視覚を、他の誰かに寸分の違いもない状態で見せることができる。…それが写真の可能性。だが、それと同時に、視界の共有こそが写真の限界でもある。視界の共有は立派なものだが、それは視覚を持つ者同士に限られた話であつて、視覚が無い者は視界を共有できない。私は思わず…それを口にした。

「その通りだけど…それがそのまま写真の限界になっちゃってるんだ。視界の共有は、あくまでも視界の共有。視覚が無い人は…共有することはできないの」

そして、

「それが写真の限界…」

トーンを落としてそう言って、私の思い悩みが心に繰返される。だが、それを聞いた彼女はすぐに返答した。

「…そうだね。でも、たとえ視覚が無い人でも、シャッターを切ることは出来るわ。そうして出来上がった写真は、視覚を持つ者が撮影したそれと変わりはないじゃない。そこは平等だわ」

視覚が無い人がシャッターを切る。そんなことは考えてもいなかった。でも、視覚がなければ、シャッターチャンスがわからない。どのタイミングで写真を撮ればいいのかもわからないし、何を写したらいいのかもわからないはずだ…。だって、目には何も写っていないんだもん…。

っていうか、私はなぜ初めて会った女の子と…こんな話しているんだろう??彼女、服装は変だし、いつの間にかお互いタメ口になっているし、一言二言話ただけで、今の私の悩みどころの中核の話してる…。

でもなぜか、ずっと昔からお互いに親しい間柄であるかのように話している…。違和感がない…。そのせいかしら??…などと、色々と考えを交錯させながら…。そして、少し焦りながら…。私は焦る気持ちを一ミリヤリ落ち着かせて、なんとか返答した。

「…た、確かに写真撮影そのものは平等だわ。でも目が見えなければ、シャッターチャンスもわからないじゃない」

言っと、目の前の変な彼女は、にっこり笑ったまま、特に考える素

振りも見せずに、

「ふふ、シャッターチャンスはね、気になる何かが目に見えた時だけに起こるものじゃないよ」

そう言つて、続けた。

「たとえば、とても美味しいご飯を食べたとする。目が見えなくても、とても美味しいご飯を写すシャッターチャンス到来だわ。たとえば、心を許せる大好きな人と、とても楽しく会話しているとすると、たとえ目が見えていなくても、最上の笑顔を写すシャッターチャンスだわ」

言つて、彼女はニツと、唇の両端を上げて笑う。つられて…つい私も笑顔になってしまう。彼女は、

「ほら、シャッターチャンス!!」

と、笑顔のままで言つた。そして、

「視界の共有は、あくまでも写真の世界の入口なの。写真に映りこむのは撮影者の視覚だけじゃない。感情も映りこむのよ。だから、目が見えているだとか見えていないだとかは関係ないの」

「写真というのは、現実の断片なの。目が見えてようが見えてまいが、誰しにも現実が存在する。誰かが撮った写真は、その誰かさんの確かな現実の一部分を切り取つた…断片なの」

「…たとえば、ピントも、構図も、被写体への距離も、なにもかもおかしな花の写真があるとする。その写真を見れば、写真を撮つ

た人は、ひょっとして、これは目が見えない人が撮ったものなのでは…？と想像することができはらずよ。写真に写った曖昧な花は、そこに花があるということを認識できながらも、はっきりと確認出来ない有様…つまり、撮影者の目が見えないという現実を、見る人に共有させるわ」

「目が見えようが見えまいが、誰しにも確かに存在する現実。その断片。それが写真なのよ」

…すごいよく喋る人だなあ…そう思いながらも、ずっと彼女の言葉に聞き入っている。この間の下澤さんの話の延長線上にありながらも、もつと深い何かを感じた。

現実の断片…。そうか、写真を撮る側に回れば、たとえ目が見えなくても、そのあるべき視界を、他人に知らせることができる。なにかを感じた時にシャッターを切れば、その感覚が写真に写りこむはずだ。そして、その感覚を写真を見た人に伝えることができる。

下澤さんが言っていた、写真を見る側の魅力…それと同じことだ。写真には撮影者の感情だけでなく、状況や状態も映りこむ。そこに写真の可能性が、新しく提示された気がした。腑に落ちた感じがして…すっきりした。…安心した。

「パシャリ！」

彼女の擬音でふと我に返ると、彼女は両手の親指と人差し指で四角を作って、私にピントを合わせて、写真を撮る仕草をしていた。

「ふふふ、なんだか…心のつかえが取れたような、そんな感じしてるよ」

彼女の言う通りだった。彼女は、私の表情を見ただけでそう言ったのではない。彼女は…きっと話を黙って聞いて、沈黙している私が発す空気を読んで…、それもあつて心のつかえが取れたと判断した。

…シャッターチャンスだと判断したのだろう。もしも彼女が本当にカメラを持っていて、今の写真が写せていれば、そこには紛れもなく…一安心した私の顔が写っているだろう。たとえ彼女が目が見えていなくても、それを映せし、出来上がったものから、私が感じた安心を読み取れるはずだ。

「…すごい」

私は素直な感想を口に出した。

「それより時間はいいのかしら??」

未だに考え込んでいる私に、彼女はニツコリ笑って問いかけた。

「橋の下の写真を撮ったら、すぐに行くつもりだったんじゃないの?」

「う、うん…そうだけど、どうして…」

さつきからなんか…、私の考えを読みとられているようなカンジ…。ふと時計を見ると、時間は一時をとくに回っている。

「や、やばいっ!…うあああ、遅刻だ…っ!」

私はどんな顔をしていたのだろうか…。彼女は私の表情をチラリと見て微笑むと、私が来た方向とは逆の方向へと…。橋を渡って歩いていく。変な人、不思議な人…。それが今の彼女の印象だ。

私は、時間や彼女の去っていく姿にアワを食って、とりあえず彼女に大声で問いただした。遅すぎる自己紹介も添えて。

「わ…、私は春日ハル！…あなたはっっ！！？」

彼女は振り返らずに、

「あ・ず・さ！…倉下梓っ！」

と言って歩いていく。

雲一つない空の青色の下、アスファルト橋の灰色の上で出会った、奇抜な格好をした不思議な人…。彼女の去っていく後ろ姿は徐々に小さくなっていく。私はふと考え込む。なぜ…。彼女は私の疑問についての話をしたんだろう…。彼女は信号待ちをしていたはずなのに…。なんで信号の向こうへ行かないんだろう…。なんで私の時間のことわかったんだろう…。不思議な事だらけ…。

たくさんの疑問を感じながら、彼女の後ろ姿を見る…。彼女の異質な服装の奇抜な色…。黒が遠く小さくなってゆく。それがさらに私の不思議を強くした。

「これだっ！！」

今度は逃がさない。私はとっさにカメラを構えて、ろくにピントも合わせずにシャッターを切った。…。私の心の中にあつた不思議だ

らけのこの感覚は、写真の内に収まっただろうか。そうして、や々と我に返る。

「や、やばいっ！……時間っ時間っ！」

私はエンジンをふかしたままのバイクに飛び乗ると、ブルーカメラまで最高速で向かったのだった。

第二話 現実の断片 vol.03 (後書き)

あずさんを奇抜な格好と評しているハルさんですが、当の本人も極めて奇抜な格好をしています。一人称視点のため、他人からおかしな人と思われるが、それに気が付いてる描写がないんですね。他の人の視点からハルさんが語られて、そこでやっと変な格好だと評されるという。

第二話 現実の断片 vol.04 (前書き)

昔、知人の女の子ですごく写真好きの方がいて、カメラ屋さんでアルバイトもされていました。その方の撮った写真といえば、本当に綺麗で構図も美しく今でもよく覚えています。バンドのライブの光景などを撮ってはそのバンドさんに渡されていたのですが、現実以上にかっこよく映っていました。腕前によっては真実以上に撮れるのか、はたまた私の目が虚実ということなのか。未だに悩んでいます。

第二話 現実の断片 vol.04

店内に入るや否や平謝りの私を、下澤さんは笑って許してくれた。

「ははは、お客さんもそんなに多くなかったし、差し支えも無かつたし、気にする事はないよ」

「人生は長い。そりゃ、遅刻の十回や二十回はあるだろうさ」

なにも無かったかのように振る舞う下澤さんを前にして、私は余計に恐縮してしまったのだった。

お客さんの相手をしながらも、ふと考え込んでいる私がいる。目が見えようが見えまいが、各自に存在する現実。写真は…その現実の一部を刈り取り、断片として一枚の紙という空間に具現化する。そして、それは他者と共有できる。

シャッターチャンスは、視界だけが知らせるものではない…そこには感覚すべてが動員されるべきだ。たとえ目が見えなくても…話しかかんたん、その他の感覚器の知らせを頼りにシャッターを切ればいい。そこに映るものは紛れもなく撮影者の現実だろう。

その通りだ…。さやか…妹は、写真は目を瞑ってしまっただけで消えてしまう…半端なものだと言った。確かにそれはそうだ。しかし、撮影者の側に回ること…写真は目を瞑ってしまった者、目が見えない者にも可能性を与えることができる。彼らは、自身では見ることのできない視覚を、写真を使うことで他者へ伝えることができる。他者がその情景を説明してやれば、撮影者も心の中に…自身の視界を創造することができるだろう。私に…写真の新たな可能性が降り

注いだ。

感覚器の知らせを重要視することは、なにも目が見えない者だけではない。それは私にとっても大切なことだ。…これからは視覚だけに頼らず、五感全体をアンテナとして写真を撮ろうと思った。

夕方になると、客足は弱まる。広く間取られたカウンターに頼杖をついて、ひたすら考え込んでいた私に、下澤さんが話しかけた。

「春日さんにもこれをあげるよ」

彼は一枚の紙を手にとって、そう言った。

「第四十九回…全国写真こんですと…??」

紙にはそう書いてある。ああ、コンテストの応募要項か。去年も一昨年も出したやつだ。

「最近応募が少なくてねえ…主催者も困っているそうだよ。春日さんも一枚出してみてごらんよ」

応募者少ないのか。そう言えば、洋香姉も同じようなこと言ってたなあ。あれとはまた別のコンテストだけど…、インスタントカメラやデジタルカメラ…と、カメラはずいぶん普及したはずなのに。

いざコンテストだが、芸術写真の項目になると、応募者は少なくなるものなのかもしれない。…今の私に断る理由など何もない。

「うん、ありがとうございますっ！出してみます」

もしこれから…私のなんらかの感覚を撮り得ることができれば…それを送りつけてやろう。たとえそれがどんなに…見栄えが良くないものだったとしても。私はそう思って、いつもとは違う心持ちで、二つのコンテストへの応募を決心してみたのだった。

それからしばらく経って、私は洋香姉に呼び出されて、熊日新聞社へと向かった。雲一つ無い、まず快晴と言えるこの天気のもと、私は単車を飛ばす。快晴で日がカンカンに照っていても、世の中の時候は、冬を未だ越していないこともあって、単車は身を切るように寒い。

吐息の白は、青く晴れた空に照らされた、私の視界を彩るアクセサリーであるかのように、遠慮なく視界に入ってくる。行き交う人々のコートの端やマフラーが風に揺れ、乾いた世界に惑うようになりびいている。しかし、それも虚しいもの。社内に入ると、空気は一転して暖かくなり、コートやマフラーも見えなくなってしまう。警備のおじさんの、

「やあ、ハルちゃん。今日もファンキーな格好だね！」

という挨拶に軽い会釈を返して、洋香姉、もとい…会社内では鈴木班長…がいる部屋へと歩いていく。

写真はもう十年を超えて撮り続けてきたけど…、今、人生史上で最も面白いと感じている気がする。ただの惰性で撮っていたはずの写真は…ここ一、二ヶ月ほどで、私の感情を映し出すもの…そして、誰かの感情が映し出されたもの…転じて、かけがえのないものに変わってしまった気がした。写真を撮るといふ…今まではなんでもな

かった行為が、とても大切に思えた。

「なんだ？ハル、今日はご機嫌じゃないか」

顔を合わせるなり、洋香姉はこう言った。

「えへへ、やつぱわかります？」

そう言うなり、洋香姉は余所を向いて、

「はん」

と、強いため息でリアクションした。ご機嫌の理由を特に聞きにこないのが、姉さんらしい。

「あーら、ハルちゃんいらっしやい。相変わらずアヴァンギャルドなカツコねえ」

部屋に入ってきた新城さんもそう言って、話に加わる。傍には守さんもいた。洋香姉が守さんに言う。

「お前、…最近やるそうじゃないか。副編も褒めてたぞ」

珍しく洋香姉が人を褒める。新城さんも笑顔で彼に言った。

「うん！守ちゃん、年が明けてからむこう、ずっといい感じよ！仕事速いし、ミス少ないし」

「あははは。いや、マグレっすよ。あんま褒めないで下さい。くすぐりたい」

笑顔でそう返答する守さんには、私が以前感じた…覇気の無さは微塵も見られなかった。態度に余裕が出ていて、オドオドしたところが無くなっていて…それでいて、不自然さがない。私は新城さんに同意して言った。

「うん。なんだか自然で寛大なカンジが出てて、良いカンジですよ」
新城さんは、

「そうそう。なんか、どっかが変わったのよね。守ちゃんじゃないみたい??」

と、不思議そうな顔で同意する。守さんは困ったような顔付きで、

「あははは…こ、困ったなあ。前がよっぽど酷かったみたいじゃないか」

と、少しオドオドしてみせる。そうそう、そっちの方が昔のらしさが出てると思った。洋香姉は一人そっぽを向いたまま、

「ホレ、言ってみる。開運グッズかなんか?それとも宗教か?…まさか、恋愛だとか言わんだろうな…」

そう言って、思い出したように手を叩く。

「忘れていた。そんなことより、今は先の用事があるんだった」

洋香姉はそう言って、何枚の写真を取り出すと、うち一枚を私に手渡す。何故か苦虫を噛み潰したような表情で。写真にはどこかで

見たことあるような面影の…セーラー服の女の子が写っていた。

『前に言っていたハルに取材してもらって子。この子だ。次の「不思議な女の子」の記事になる。』

ああ…そう言えば、地方欄の撮影の仕事やコンテスト以外に…そんな話もあったっけ。一瞬「???」となった私の表情から、思いを見抜いた洋香姉が言う。

「おいおい、私的にはこれが一番重要なことなんだぞ。ハルはこの子にインタビューもしてもらったからな」

言って、

「前にも言ったと思うが、今回私は忙しくてこの件には関われん。悪いが、ハル一人でこの子を探して、会って、インタビューを行い、写真を撮ってきて欲しい」

付け足すと、新城さんが、「ごめんね…」と言わんばかりに、片目を瞑って右手を顔の前に立てて、

「社員配置換えがあつたばかりなの」

と付け足す。別にそれは構わない。

「別に構わないですよ…でも、探すって…」

この写真しかないのかな…と思って、他の写真を手にする。どれもが遠目から写したもので、セーラー服、黒髪で幼い顔立ちの少女の顔が確認できる。ふと…裏を返すと、写真裏には「倉下梓」と書

いてあった。

「くらした…あず…さ？」

私の写真を見る様を見ながら、ゆつくりと洋香姉が口を開く。

「そう。倉下梓。その子の名前だ。この間…公休を使って少し調べたんだが、当時十三歳で帯山中学に在籍している。その後は知恩高校に進学して…年齢的には本年度で卒業しているはずだ。現在十九歳。知恩の特別進学科だから…今は大学生かもしれない」

「ハルの一つ年下だ」

どこか憂いのある表情の洋香姉がそう言うのと、

「ハルちゃんってやつぱわっかい…」

嘆くような顔つきで、新城さんがそう付け足す。彼女の心を推測すると、

（ああもうこんな若い子を前にして、私はなんでこんなところで、仕事外で変な親友の変な雑誌の制作手伝いなんてやらされてるのよっ！スーッだつてヨレヨレだし、彼氏もないし、不規則な仕事のせいでお肌も荒れるし、残業多いし、休みもないし…）

と、大体こんな感じに違いない。可哀想だけ見てて楽しい…見てて楽しいけど、ホントに可哀想…アンビバレンスな感情が私に生まれる。この感情を撮影出来ないのが、ホント残念だと思った。…心から。

そんな私を尻目に、洋香姉は言葉を続けた。

「すまんが、ここから先はハルの仕事だ。私も真理も引継ぎやらで身動きがとれんし、調子が良くて使えそうなアイツも、長期で出張が決まってるしな」

そう言つて、一人仕事に没頭してる守さんを見やる。彼は、さつきから私たちの言葉を聞く素振りも見せずに、席を立てて資料を取りにいったり、文面や写真とにらめっこしながら、真剣な眼差しで仕事している。

(???…こんなに集中できる人だったんだ)

私は洋香姉の方を向き直して、親指をグツと突き立てて言った。

「わかってるわかってる。学校関係に当たればすぐに居場所はわか
ると思う。まかせといてっ！」

テンションを上げて返答する私に、二人は少し驚く。

「なんだ、頼もしいじゃないか」

「私は社内でな少しは動けるから…調べ物なんかで手伝えることがあつたら、遠慮なく言つてね」

二人はそれぞれ私の返事に言葉をかけた。…っていうか何より、あの時に橋で出会った女の子が取材対象だったなんて…。変な巡り合わせだ。またあの橋に行けば、案外かんとんに見つかるかもしれない。…でも、面白いじゃない。

「みんな待つてて！！写真のことも、銀行強盗事件のことも、個人的な話も…全部ひっくるめてインタビューしてきてあげますよ。ハルの特別仕立てのロングインタビューでねっ！！」

私の自信満々でやる気に満ちた笑顔とセリフを前にして、洋香姉も新城さんも驚きや喜びを通り越して、呆氣にとられているのだった。

妹のさやかを目の前にして、私はフフンと鼻を鳴らして、自信ありげに言う。

「写真はね…確かに目をつむれば消えてしまう。だから、目が見えない人に見せることはできないわ。でもね、たとえ目が見えない人でも、シャッターを切ることができるのよ。そこには目が見える人と同じ情景が写りこむ。いい？そこが写真は平等なの。そして、その視界を切り取った…確かな現実の断片を、赤の他人に共有させることができるのよ」

私の演説を黙って聞いていた妹はあきれて、

（はぁ…またお姉ちゃんが馬鹿なことを言っているわ…）

といわんばかりの…いかにもな表情を見せている。私は、この表情と空気や雰囲気は…長年一緒にいて育って、血の繋がりもある私と妹との間柄を通してしか、生じえないものだと感じた。そして、呆れてばやく妹の小憎らしい笑顔が消えないうちに、ささつとカメラを出して、写真を撮る。

「な、なに撮ってんのよ！プライバシーの侵害だわっ！このパパラッチめっ！！」

さやかは顔を赤くして、両手バタバタさせて顔を覆う。しかし、抵抗するが遅し。それも間に合わず、すでにシャッターは切られていた。妹の文句をバツクにして、私は自室へ、満面の笑み…というか、どや顔で凱旋したのだった。

暗闇の中、赤の光に照らされる。現像が出来上がるとする数十枚の写真を前にして、どれをコンテストに送ってやるうかと悩む。

例の彼女…橋の上で撮った倉下梓の写真は、感覚に気づいてとっさに撮ったせいか、薄っすらとぼやけていて…かろうじてその後ろ姿が、中央より逸れて右側に写っているだけだった。写真の中央には橋が写っていて、その中には車一台も犬猫一匹も、通行人ですら誰一人として写っていない。遠く小さくなった彼女が右側にいるだけだ。

ぼやけた中に写る彼女の小さい後ろ姿は、写真のいびつさのためか、異彩を放っていて…あの時感じた不思議さは、奇しくもそこに収められていた。

私はこの写真に、洋香姉さんの同好会の雑誌の名前…「不思議な女の子」をもじって「不思議な彼女」とタイトル付けた。写真に命が吹き込まれた気がした。

ついさっき撮影した妹の呆れ顔は…思ったよりも近くて、写真一面に小憎らしい顔が写っていた。普段から周囲にお高くとまっては、いい子ぶっている彼女のこの本性の顔は…見ているだけで笑いを誘う。我ながら、近しい仲にしか見せない彼女の素顔が撮れたと思う。

しごくシンプルに「妹」とタイトル付けてみる。単純ながらしつくりきて、また笑いがこみあげてきた。

こうして私はそこに出来た写真から選んだ十数枚に、一枚一枚タイトルを付けていった。感性を当てにしてシャッターを切った方がより生々しい現実の断片が切り落とされる。失敗も何枚があったが、成功したものは見る分にも面白い。飽きない。

写真はただ素晴らしいものを、精巧な機材と高い技術で綺麗に撮影するだけのものではない。そこには撮影者の心や立場、佇まいがくつきりと存在しているべきものだ。それをわかるようになっただけでも、それを写真に映しこむことができるようになっただけでも、私は写真の新たな可能性を確信できたと思う。

今の私なら、目が見えない人が撮影した写真を見て…撮影者の現実を見抜いて、そこに視界の共有を見出すことができるかもしれない。

…コンテストは二つ。選りすぐった一枚を二つのコンテストに送るか。それとも、二枚選んでそれぞれに送るか。少し悩んだ後、現像後の写真の出来ではなく、あくまでも撮った瞬間の感覚の手応えを選択の理由として、決心して…私は封筒に写真を入れた。

次の日の朝早く、ポストに二通の封筒を入れた私は独り言を発す。

「仕事一つ終わり。じゃあ、もう一度…あの不思議な彼女に会いに行こうかなっ！」

そう言って、バイクにまたがるや否や、いつもの倍はあるようなスピードを出して、新たな情報を取りに熊日新聞社へと向かったの

だ
っ
た。

第二話 現実の断片 vol.04 (後書き)

第二話はこれにて終了で御座います。読了本当に有難う御座います。次も一風変わった主人公が登場しますので、是非読み進めてみて下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3430z/>

道標のあずさ

2012年1月9日04時54分発行